



千葉大学医学部同窓会報 第125号

題字 故 鈴木五郎 (大11卒 元るの は な 同窓会長)

編集発行者
千葉大学医学部
るの は な 同窓会報編集部
〒260-8670 千葉市中央区玄鼻1-8-1
千葉大学医学部内
るの は な 同窓会
電話 (043) 202-3750
FAX (043) 202-3753
e-mail:idosokai@med.m.chiba-u.ac.jp

平成十二年度 るの は な 同窓会総会開催

平成12年度るの は な 同窓会総会が、平成12年6月25日(日)午後2時より、椿山荘において開催された。

小幡裕理事の司会により、貫洞一夫副会長から開会の辞が述べられた。会議に先立って、物故者100名の冥福を祈り、黙祷を捧げた。井出源四郎会長挨拶に続いて、木内政寛理事より会務報告があった。また議題については各担当理事から説明が

を祈り、黙祷を捧げた。井出源四郎会長挨拶に続いて、木内政寛理事より会務報告があった。また議題については各担当理事から説明が



あり、審議承認された。(詳細は19面に掲載)引き続き、平成12年度るの は な 同窓会賞の表彰式が行われた(関連記事は本号19〜20面および124号に掲載)。総会終了後、懇親会が行われた。

会長就任にあたって

長澤仁一 (昭24)



去る6月25日の「るの は な 同窓会総会」におきまして会長に選出されました24年卒の長澤でございます。名尾前会長・井出前会長

の後を受け継ぎまして、どこまでやるかは分かりませんが、微力を尽くして一生懸命に務めさせて頂きたいと心に決めております。名尾会長の号令で始まった「るの は な 同窓会」の活性化運動は学内理事のご努力と学外理事のご協力により、先ず会報の定期的発行が行われるようになり、内

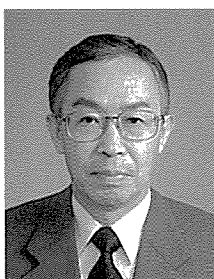
容も豊富になりました。井出会長は「るの は な 同窓会」のさらなる発展のため、学術賞・功労賞を制定され平成11年度は学術賞は7名・功労賞は3名の方々が受賞され、また、9名の方々に第1回学外研究助成金が渡されました。会報も鈴木編集委員長をはじめ編集委員の方々(特に学生の有志の参加もあり)のご努力で第123号は26頁もの分厚いものが作られました。この10数年の「るの は な 同窓会」の発展は目をみはるものがあります。私も常任理事として会議に出席させて頂いておりましたが、歴史的なことで困った時に頂く萩原参与のご助言が会議の進行に大変寄与されていたことも忘れてはなりません。

地・東京の下町で内科を開業しております。今は年齢の関係でいろいろな医政に關する仕事はなくなりまして、介護認定審査会の委員をしております。私は、開業医にとって同窓会はどうあったらいいか、どうあって欲しいかを前々から考えておりました。また、学外で勤務して臨床上に研究に従事していらっしゃる先生方と学内との交流は

医学部長 就任挨拶

生理学第二講座

福田康一郎 (昭41)



克前医学部長の尽力により、新制大学発足以来の大規模な大学院教育研究組織の改組が予定されております。このような情勢下では、教育、研究、診療の原点に立ち返り、信頼され、かつ、発展への志向をもつ医師育成の

どうすればスムーズにゆくか、勿論、常任理事会のご意見を頂かなければなりませんが、まだまだ検討してゆく課題は沢山あるものと思っております。「るの は な 同窓会」の諸先生方のご意見を頂けるシステムも作りたいと考えております。

基礎を確立しておくことが必要と思われまふ。このためには、医学部自体が根本的に意識を改革する必要がある、また、医学部・附属病院が一体となって関連教育病院・研究施設等との緊密な協力関係を確立することも肝要と考えられます。大学評価・学位授与機構による学部別の評価も具体化しつつあり、今後は社会と地域の求める大学へ脱皮しない限り21世紀への展望はないといわれております。永い伝統を誇る「るの は な 同窓会」の先生方からの忌憚のないご意見を承り、堅実かつ活力のある医学部組織を目指して実務的運営に微力を尽くす所存であります。よろしく指導のほどお願い申し上げます。

「るの は な 同窓会」の諸先生方のご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げます。

紙面紹介

同窓会長退任挨拶	二面	名誉教授近況	十二面
就任の挨拶	二・五面	ゲッティングン大学退任記念の記	十二面
人事異動	二面・十三面	病院紹介	十二面・十三面
同窓会賞受賞者の言葉	五・八面	各地のるの は な 会だより	十三面
同窓会員著書紹介	八・九面	クラス会	十四・十七面
教室だより	十面	総会に出席して	十七・十八面
第3回アジア・オセアニア	十面	総会議事録	十九面
アンドロジョー学会を主宰して	十二面	附属病院ニュース	十九・二十面
			二十二面

同窓会長退任の挨拶

井 出 源四郎 (昭19)



6月25日、今年度のものはな同窓会総会が東京のものはな会(貫洞一夫会長)のお世話で椿山荘に於て開催されました。多数の同窓諸兄姉のお集りを得て、盛會裡に終ることの出来ましたこと、まことに喜ばしいことでした。さて私こと本総会に於いて2期6年間の会長職を退任することが承認

えることが出来たことが、活性化の第一歩であったように思います。その間熱心に編集委員会の皆さんに心からお礼を申し上げます。

又同窓会活性化のために計り知れないご努力をいただいた東京のものはな会を始め、関東各県支部の活動も徐々に活発となり、最近では遠隔の地にまで広がり、夫々の地域における同窓会開催の記事が会報を通して報告されるようになり、これまた実に嬉しい限りであります。各地域の支部長各位に深い敬意を払う次第です。

さらに同窓会の新しい事業として、ものはな会功労賞、学術賞、そして学内外

に対する教育、研究のための資金援助等々、事業計画が次々と創設実行に移されるようになったことも特筆すべきことかと思えます。これも偏に大学本部の常任理事を始め事務職員の方々の総務部、経理部、事業部等の携みない努力の結晶として評価し、今後益々の発展充実を期待し、感謝の念に耐えませぬ。

然し他方眼を外に向けた時、他学の同窓会と比較し未だしの感を禁じ得ません。そして又現代ほど教育と医療のあり方が問われている時代もかつてなかったのではないでしようか。

本会々則にその目的として「本会は千葉大学医学部と緊密な関連を保ち、その

発展に貢献するとともに、会員相互の親睦を図り、あわせて医道の昂揚に努めることを目的とする」と記されています。同窓会とは同志の集合体であり邂逅の集団であります。邂逅は天命であると私は考えております。

21世紀を目前にして、本会も細々ながらもその道筋は見えてきているように思えます。今後私は微力ながら一会員として寄与して参りたいと考えておりますので変らざるご厚誼とご指導を賜わりたいと存じます。本会の益々の発展と会員同志諸兄姉のさらなるご健勝を念じて、今日まで賜わりましたご協力ご支援に対する御礼のご挨拶といたします。

人事異動

教授昇任

精神医学

伊豫 雅臣 (昭59)

教授昇任

微生物学第二

盛永 直子 (千交理昭42)

(同講師より)

公衆衛生学

島 正之 (昭59)

(同講師より)

外科学第二

鈴木 孝雄 (昭52)

(同講師より)

耳鼻咽喉科学

沼田 勉 (昭54)

(同講師より)

歯科口腔外科学

鶴澤 一弘 (巨大松平3)

(同講師より)

臨床検査医学

朝長 毅 (昭59)

(科学技術振興事業団派遣研究員・京大より)

肺研第一

馬場 雅行 (昭50)

(呼吸器外科講師より)

分化制御学

岡田 誠治 (自慢大昭60)

(同助手より)

発生生物学

青江 知彦 (昭62)

(同講師より)

講師昇任

薬理学

植村 展子 (明葉大昭40)

(同助手より)

形成外科

宇田川晃一 (昭53)

(千葉県こども病院形成外科主任医長より)

人工腎臓部

志賀 英敏 (昭62)

(集中治療部助手より)

病理部

尾崎 大介 (弘前大平3)

(病理学第二助手より)

教授就任挨拶

解剖学第一講座

森 千里 (旭川医大昭59)



座を担当させていただくことになりました。多くの著名な学者を輩出した伝統ある講座を担当するにあたりその責任の大きさを痛感しております。

今日、肉眼解剖を担当している多くの解剖学講座は、

平成12年4月1日付で千葉大学医学部解剖学第一講

教育業務として解剖学を担当している一方、実際の研究は細胞生物学、神経科学、発生生物学、分子生物学等を行っております。つまり、肉眼解剖学担当教官は、教育者として将来の解剖学を担う後継者の育成や医学生への濃密な教育指導という役割を務めながら、研究者として世界レベルの研究を発表し続けていかなければいけない現状にあります。それ故、今後本講座は、教官と技官が一体となって、

肉眼解剖に対する新しい教育・研究体制を確立し、高水準の研究を遂行する一方、多くの優秀な研究者が育っていく環境を作っていく予定です。

次に、私の研究テーマと略歴について簡単に説明させていただきます。昭和59年に旭川医科大学を卒業した後、平成2年まで京都大学医学部第三解剖学教室の星野一正教授の下、プロラクチンを中心としたホルモンの精子形成や受精への影

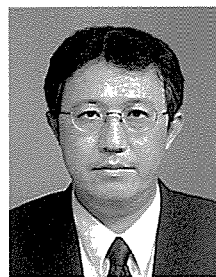
響について研究しております。京都大学で学位を取得後、平成2年から平成4年までは、米国立衛生研究所・環境健康科学研究所(NIEHS/NIH)のEddy博士の下、精子形成のメカニズムに関する分子生物学的研究に従事し、平成4年より京都大学に戻り、塩田浩平教授(大学院医学研究科生体構造医学講座)の下、生殖発生毒性や発生生物学を中心とした研究を続けておりました。また、平成8

年に10ヶ月間、NIEHS/NIHに再度留学し、大学卒業後より継続的に行ってきた精子形成とホルモンに関する研究や、生殖毒性に関する研究の延長線上として、当時米国にて社会的に話題となっていた内分泌攪乱物質(環境ホルモン)問題に関する研究を始めました。本講座におきましても、内分泌攪乱物質問題に関する応用科学的研究を「社会のニーズに応える研究」として位置付け積極的に進めていくつもりですが、当然のことながら発生生物学を中心とした基礎科学にも力を注いで行きたいと考えております。

最後に、ものはな同窓会の諸先生方には宜しくご指導・ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

精神医学講座

伊豫雅臣(昭59)



平成12年6月1日付で佐藤甫夫先生の後任として千葉大学医学部精神医学講座を担当させていただくことになりました。当講座は明治40年(1907年)に松本高三郎先生が初代教授となつて以来、私で7代目となります。伝統ある講座を担当することとなり、責任が重大であると認識しております。

私は昭和59年に本学を卒業した後、神経科精神科(当時、佐藤三三教授)に入局いたしました。1年半の研修医の後、木更津病院(当時、石川民雄院長)に精神科医師として就職し、1年後(昭和61年10月)、市川市国府台の国立精神・神経センター精神保健研究所薬物依存研究部(当時、福井進部長)に異動いたしました。同部は発足したばかりで新しい部の運営に微力でしたが協力できたことは大変よい経験であったと

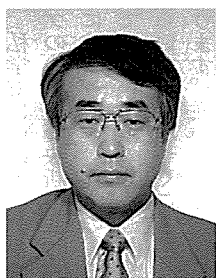
思います。そこでは薬物依存および薬物誘発性精神病について臨床および基礎的な視点から研究させていただきましました。またこの間に米国のNIHにある米国立老化研究所(NIA)神経科学研究部(当時、Stanley I. Rapoport部長)へ客員研究員として留学させていただきましました。平成7年1月より今回の異動までは、浜松医科大学精神神経医学講座(森則夫教授、福島医大卒)に助教として在任しておりました。そこでは森教授のご厚意のもと、臨床・研究・教育に携わらせていただきました。このような略歴ですが、これまでのものはな同窓会の方々に公私にわたって大変お世話になりました。特に卒業以来初めて千葉から離れた浜松においては、本当にお世話になりました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。私の研究分野のひとつとしてポジットロン(C)を用いた精神神経疾患に関する研究がございます。この研究は研修医の頃から千葉市稲毛にあります放射線医学総合研究所で行って参りました。

た。浜松医科大学に異動した後は、浜松ホトニクス中央研究所や静岡県西部医療センターにおいて引き続き研究をさせていただけるという幸運に恵まれ、この研究は一貫して行なっていることができました。今後も続けていければ幸いと考えております。

ところで、独立行政法人化など大学を取り巻く状況は現在大きく変化しております。精神医学における研究も大きく変化しており、特に「脳の世紀」と呼ばれる大型予算も組まれ、多くの異分野の研究者も脳研究に参加してきております。しかし「精神科医は科学研究者ではなく、精神科への予算配分はない」との噂も

東京女子医科大学附属第二病院小児科

杉原茂孝(昭55)



このたび、平成12年4月1日付で、東京女子医科大学第二病院小児科の教授を拝命いたしました。大変光栄に存じますとともに、これまでご指導いただきま

まことしやかに聞こえてきます。また一方で、精神医療に対する社会の注目も非常に大きくなっており、様々な社会問題について精神医学的観点からの意見も求められております。我々精神科医に課された使命は重要で多大であります。目の前の患者さんに最善の医療を提供するとともに、将来にはもっと良い医療が提供できるような、教室の方々と力を合わせて臨床・研究・教育について一歩一歩研鑽を重ねていきたいと思っております。

今後とも、るのな同窓会の方々から、暖かいご支持が得られることを祈念いたします。よろしく願ひいたします。

した諸先生方に心からお礼申し上げます。

東京女子医科大学第二病院は、昭和9年に荒川区の現在地に尾久病院として開設され、66年目を迎えています。荒川区、足立区、葛飾区、3区からなる東京都二次医療圏の中核病院であり、救命救急センターの開設、新外来棟の建設、病棟増設計画なども進み、現在

も発展しつつあります。小児科は昭和42年に始まり、私は三代目となります。現在の同門会員数は、232名となっておりますが、村田光範前教授(昭35)を始め、千葉大卒の先生方が15名同門会に入っておられ、教室の発展に寄与されました。この点で千葉大とは非常に縁の深い教室であります。私は、昭和55年に千葉大学小児科に入局し、中島博徳教授のもとで小児内分分泌疾患の臨床研究を始めました。昭和60年に国内留学として大阪大学医学部バイオメディカル教育研究センターに移り、免疫学の基礎的実験法を学びました。特に甲狀腺炎や1型(インスリン依存型)糖尿病といった内分分泌臓器の自己免疫疾患について、動物モデルを用いてその病態や発症機序の解析を行いました。平成1年より米国NIH、NCIに留学し、自己免疫疾患の病態や発症機序につきTリンパ球の機能を中心にさらに研究を進めました。この間多くの基礎医学分野の研究者と交流を持つことができました。疾患のとりえ方、医学研究の進め方等についても広い視野で考えることができるようになったと考えております。

平成4年に千葉大学小児科に戻り、新美仁男教授のもとで、小児科医としての全般にわたる再教育を受け、また、免疫学の知識を基に新たな観点から小児内分分泌疾患についての研究を進めました。

平成9年に新美先生、村田先生のご推薦をいただき、東京女子医科大学第二病院に助教として移った後は、小児の生活習慣病、栄養、運動スポーツ等についても研究対象を広げ取り組んできました。

わが国においては少子化が進んでおります。第二病院を取り巻く荒川区、足立区、葛飾区においても少子化の傾向がありますが、最近10年間の診療状況をみると、小児科のこの地域における需要はむしろ増加しています。患者さんは、1次医療から3次医療まで行う大学病院として第二病院小児科をとらえています。地域の実地医家の先生方と連携をさらに深めて期待に答えられるような医療を実践していかなければいけないと考えております。また、このような状況を踏まえ、当小児科を優れた小児科医を育てるための初期研修施設として位置づけ、教育に力を注ぎたいと考えております。

小児の診療にあたっては、まず第一にsympathy(共感)とpassion(熱意)が大切であると常々考えております。特に小児科は、幅広い視野に基づく包括的医療が必要です。が、さらに、免疫学、分子生物学等の医学の進歩にも乗り遅れないように努力を怠ってはいけないと思います。

微力ではありますが、小児医療の向上のために教育、診療、研究に努力する所存でございます。今後とも、るのな同窓会の諸先生方の一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

祝 叙 勲

平成12年 春叙勲

勲三等旭日中綬章

伊東 和人(昭23)

勲三等瑞宝章

東條 静夫(昭23)

勲五等双光旭日章

山崎 芳久(専25)

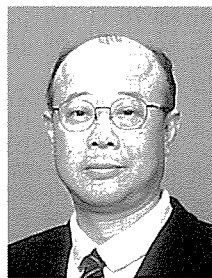


医学部長 就任挨拶

順天堂大学医学部長

奥村

康 (昭44)



千葉大学の大学院で多田富雄先生(東大名譽教授)に巡り合った事が契機となりまして免疫学に足を踏み入れました。多田先生と一緒に東大に移りましてから約6年後、独立しまして現

在の順天堂大学の免疫学で働いております。従いまして、今も、多田先生のオフィスからスーパの冷めない距離におりますので時々、一杯を御一緒にいただき、薫陶を受けております。約16年前、私が順天堂大学に奉職したころには、すぐ傍らに大先輩の白壁教授がおられました。先生が日本のみならず世界のその分野を牛耳っておられました。い

つも先生のお尻にくっついて飲ませていただいておりますので、先生の幅広い人脈に接することも、又私学でのやり口も身をもって教えていただきました。私学では重要事項がトップの人数の決断で短時間に決まります。官立の組織で10年かかるのも2週間くらいで決着がつくこともあります。従いまして、きわめて責任ある決断に戸惑うこともありませんが、理屈ではなく本能的な感覚でやらせてもらっています。幸い、今順天堂大学は、研究も診療も教育も加えて経営もす

べて昇り調子であります。ほとんどの国公立の病院が今から冬の時代に入りますのに反し、私の働いている私立医大は春を迎えようとしております。医学部長のひとつの仕事は、利益誘導的な営業本部長的なところがあります。研究室に限り、あまり縁のなかったネクタイも霞ヶ関に行くためには必要なので、就任の日には理事長のネクタイを払い下げてもらいました。御茶ノ水近辺で時間があるときはぜひお立ち寄り下さい。ネクタイ姿でお迎え申し上げます。

泌尿器科・耳鼻科・眼科の15科に及んでいます。1日外来患者数は700名でベッド利用率は80〜95%というところ。当病院の特徴を挙げると腎臓内科・透析科・健管センター・老健施設併設であります。腎臓内科は家里副院長を中心に3名の医師で構成され千葉県下からたくさんの方の腎炎・糖尿病性腎症の患者さんの紹介を頂いています。透析科は室谷典義部長(昭55)以下5名の医師と臨床工学士12名看護婦34名で250名の患者さんの透析を行っています。千葉県下では有数の透析センターであると自負しています。

これがだけの透析患者さんを抱えますと循環器疾患・整形外科疾患・消化器外科疾患を合併する患者さんが増えてきます。また院外からもこれら疾患を合併した患者さんの紹介が数多くなっていますので、腎透析センター病院としての性格が益々強くなり、さらなる期待に答えられるよう努力が必要と考えています。

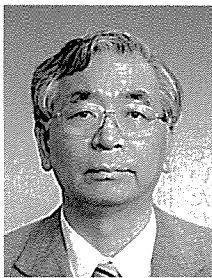
①地域住民から信頼され安心して受診できる病院にする。接遇に配慮し急患を断らないことが大事であります。②職員全てが病院の諸問題に知恵を絞る、個人の技術の向上に心懸けチームワークの良い病院にする。③地域の病診連携を充実し紹介率が30%以上の地域中核病院にする(現紹介率17%)。④リスクマネージメント委員会の指導とインシデントレポート提出の徹底により医療事故防止に全力を尽くすこと。以上の4点の達成のためには職員一人ひとりの意識改革と努力が必要であります。今後共るのほな同窓会・千葉大学の御支援を切にお願い申し上げます。

病院長 就任のご挨拶

千葉社会保険病院院長

西島

浩 (昭44)



平成12年4月1日付で千葉市社会保険病院院長を拝命致しました。嶋田俊恒前院長、谷修一全社連副理事長、千葉大学第二外科落合武徳教授の御推薦を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

私は昭和44年に千葉大学を卒業し千葉大研修医を経て昭和46年4月千葉大学第二外科に入局し岩崎洋治先生のもとで腎移植外科、肝胆膵外科の診療研究に従事して参りました。昭和56年4月に当院外科部長として赴任して以来19年間にわたり、第二外科の教育出張病院として外科を充実すべく努力してきました。平成6年からは医局長として、平成10年からは副院長として

病院全体を視野に入れ経営に診療に微力を尽くしてきました。今年からは病院管理者として重責を担い、経営者として舵取りを要やまらぬよう、また患者さんから病院が全幅の信頼を頂けるよう全力を尽くす所存です。病院の沿革は昭和18年3月550床の結核病床を有する国立健康保険千葉療養所として発足、昭和26年社会保険病院松籟荘と改称し全国社会保険協会連合会に経営が移管されました。

この時から数えて来年は記念の50周年を迎えることになりました。また昭和46年に病院名を千葉社会保険

当院は全国に53ある社会保険病院の一つで公設民営の病院であります。ベッド数は200床、職員数は355名、医師数は35名であります。副院長は家里憲二(昭45)、嶋貝文彦(昭49)の両名で、内科部長は内藤隆(昭53)、外科部長は荻野幸伸(昭53)であります。診療科は循環器内科・消化器内科・腎臓内科・呼吸器内科・リウマチ科・小児科・一般外科・消化器外科・肛門科・整形外科・産婦人科・透視科・

次の特徴は健康管理センターが付属していることです。木村邦夫(昭45)センター長を含め常勤医師6名を擁し年間3000人の受診者を診ています。二次検診で病

君津中央病院院長

福山悦男 (昭36)



この度、平成12年4月1日付で国保直営総合病院君津中央病院の病院長に就任いたしました。私は昭和36年千葉大学を卒業後第一内科に入局、三輪清三教授、小藤田和郎先生の下で肝臓病の勉強をさせていただきました。昭和45年1月1日付で現在の君津中央病院内科に勤務、昭和46年より三輪清三名譽教授が病院長として就任され、再度臨床家としてのご指導を頂きました。その後私は地域医療に専念する中で、千葉大学大藤正雄教授、昭和大学の栗原稔

教授などのご指導を頂きながら消化器系末期癌の化学療法、更に緩和ケア医療、在宅医療に関心を抱きながら現在にいたりました。

今回、北方勇輔前院長の計画を引き継ぎ、身に余る大役と思っております。

当院は四市(木更津市、君津市、富津市、袖ヶ浦市)の組合立の病院として、良質の地域医療の提供、高度医療の担当、医療技術者の教育などを理念として参りましたが、ここ数年、当院のみならず医療界全体として経済界の不況、医療費の抑制政策に基づく病院経営の不安定化が続く、特に最近では医療安全化対策の問題、情報開示の問題が活発化してまいりました。このことは、端的に言えば、患者さんから良質で適正な医療(医療の質)と親切でわかりやすい医療(情報の開示)を求められているということです。このような状況下において、当院でも職員一人一人が地域に対して良質な医療とサービスの提供に心掛け、更に経営努力に対する意識改革を迫られております。特に診療の中心となっている医師に認識を高めていただかねばならないと考えております。そして高い倫理観と誠意ある接遇

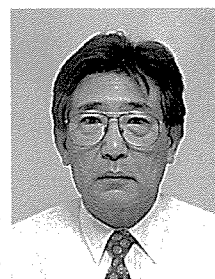
を身に付けて頂き、患者さんに対して優しい対応が必須だと思います。いづれにしても地域の中核病院として病診、病病連携を円滑にして、あらゆる状況にも即応できるように頑張っていく所存です。

なお現病院の老朽化、狭隘化に伴い、平成15年3月竣工を目指して新病院の建設を行っております。場所は現病院の隣接地で、延床面積約五一、五〇〇㎡、地上10階、地下1階の665床の免震構造で、診療科は総合診療科、透視科などを加えて29診療科の予定で、緩和ケア病床、周産期病床、開放型病床などの設置も予定しております。更に全体として救命救急センターの高度機能化、災害拠点病院としての機能整備、臨床研修のための機能整備などを盛り込んでおります。

前病院長もイメージしておられた「人と自然と社会の共生」という感覚で、美しく優しい環境の病院を目指すし、21世紀の医療を担うことの出来る、そして地域の皆様にご満足いただける病院が完成するように懸命の努力をするつもりです。どうぞよろしく願ひします。

松戸市立病院院長

香西



平成12年4月1日付で、国保松戸市立病院院長を拝命いたしました。

私は昭和38年千葉大学を卒業、第一外科に入局、故綿貫重雄教授の下に一般外科の勉強をさせて頂き、昭和47年松戸市立病院外科に就職いたしました。

今年、病院は創立50周年を迎えますが、当時は、前年度に200床の増床を行い、

義(昭38)

総ベッド数382床、医師23名の病院でした。しかしながら若い医師が多く、そのエネルギーはすさまじく、松戸市の人口増加とも重なり、各科からの増床の要求が強く、増改築を繰り返して、現在の22科、623床、医師122名の病院に発展してまいりました。

その間、昭和56年厚生省臨床研修指定病院、昭和60年千葉県の3次救命救急病の指定を受け、名実共に千葉県北部の基幹病院として今日に至っています。

歴代の病院長のご指導の下、あらゆる疾患を当院で

完結できる体制を目標に、院内の整備、充実に努めて参りました。その結果、小児センター(小児科、新生児科、小児外科160床)、独立型救急センター(20床)の設置が当院の特長として挙げられます。

最近、医療経済の面から、自治体病院不要論も時に耳にいたしますが、私は常に良質なしかも地域住民の側にたった医療を安定して供給できるのは自治体病院だからこそ可能であると確信しています。

しかしながらこれからの医療は一病院のみでは患者さんに対する医療サービスを完結することは困難であり、良質な医療を提供して

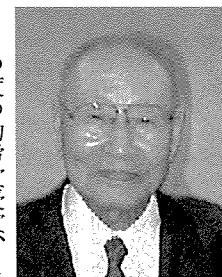
いくためには、地域の医療施設が各々の特長を生かし、機能を分担していくことが必要な時代であると思っています。

今まで以上に、地域の病病、病診連携を密にして、いかに医療連携ネットワークを形成していくか、早急に取り組んでいかなくてはならない課題と考えています。

私に残された時間は僅かではあります。30年近くお世話になった病院のため、地域医療のため全力投球をする覚悟でいます。これからも同窓の先生方には相変わらずご支援をお願い致します。

はな会井上幸万会長のご推薦を戴いた賜物であり改めて御礼と感謝を申し上げます。

琉球大名教授 小張一峰(昭15)



この度の功労賞受賞、この年になって思いもかけない栄誉です。有り難くお受けしました。

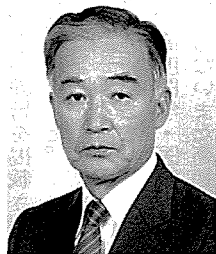
昭和卒業、医者になってから本年で60年になります。卒業当時は、すでに大学の門は戦場に開かれていた時代でした。大学に残って研究生生活を送るよりは早く実地医家になりたい、こうした気持ちだったのでした。

るの は な 同 窓 会 賞

受賞者の言葉

功労賞

上尾胃腸科外科医院理事長 伊藤敏夫(昭30)



この度のるの は な 同窓会賞功労賞をいただき、誠に光栄に存じ感謝申し上げます。

今回の賞は地域医療及び保健衛生の進展と言う事ですので、私個人で成し得るものではなく、多くの先生方のご支援の賜物であります。とくに埼玉県の各種検診事業に部長として活躍してきましたのも、千葉大学第2外科で学んだ事を継続し、実践してきたに過ぎません。又慢性的な看護婦不足にたいして、上尾市医師会会

長時代に看護専門学校を創設し、看護婦さんの養成に努力したと言う事で、県の専門学校長会会長に就任、その後県内各医師会を中心として7校も看護専門学校が創設されました。このように短期間に多数の学校が増設されますと実習病院やその指導体制に格差を生じ、単に国家試験の合格率だけ良ければ可と言う訳にはまいりません。従って学校間格差を解消し、学生の質の向上を計るために、官公立を問わず全県下の看護専門学

校の先生と学生が一同に会して、看護学生研究会を企画し、実践しました。既に10年以上続けられておりますが、今日では学生が主体となって発展的に運営されておりますことは幸いであります。

一方厳しさを増す医療経済のもと、日本医師会医療経営検討委員会委員、埼玉県社会保険支払い基金審査委員長の責務をになつて参りました。

今回の受賞はるの は な 同窓会 信理事、埼玉の

メンバーとして、マニラを始め流行地のあちこちで、コレラに関する仕事をしてきました。

WHOからかえりました時、大学の非常勤講師を短い期間勤めた事がありました。この時、近く開設される看護学部の学部長をひきうけるようにという依頼があり、暫くの間でしたが、ナースの偉い方々と準備作業をいたしました。しかし、感染症しか知らない私にはどうしても無理な地位に思えて、お断りをしてしまいました。本学にずい分とご迷惑をおかけいたしました。こうした経歴の私にとりまして、功労賞受賞は、まことに心苦しく、それだけに人一倍有り難く感じております。

プライマリ・ケア学会会長

渡辺 武(昭27)



このたびは「地域医療の構築及び発展に関する功労」という名誉ある桶をいただきました。どなたでも医師である以上当然の事であるのに恐縮しております。

かえりみまず昭和23年に千葉医大に入學して間もなく社会医学研究会(社医研)に入りました。吉田亮先生(後の学長)がキャップで五井町の結核集団検診事業に青春の汗を流しました。27年に卒業して第2内科に入局し10年後船橋で開業、丁度国民皆保険制度がスタートした時です。開業してみると教科書どおりの患者さんは少なくまた医局で学習した知識ではあまり実用的ではない、さてどうしたものかと思っていたとき「実地医家のための会」というものがあると聞いて早速入会しました。昭和39年第4回目の例会だったと記憶しています。この会は毎月第2日曜日に開業医が集まってただ講義を聴くだけでなく上下の区別なく自由な建設的な意見、臨床経験を披瀝し「人間の医学・全人的医療」を討議することを趣旨としたボスのいない会で昭和38年発足以来一回も休むことなく本年7月には40回となりました。

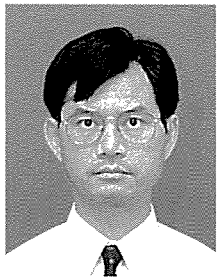
この会の創始者は本学16年卒の永井友二郎先生(第2内科)です。機関誌「人間の医学」は現在206号。そして昭和53年の創立15周年の記念事業として日本プライマリ・ケア学会が誕生しました。昨年その5代目の会長に就任しましたが「ゐのはな同窓会報122号」誌上に学会の趣旨を掲載させていただきます。

元来、地域医療という特別な医療があるわけではなく、高度医学・医療の発展にとともにまた高齢社会をむかえて従来型の個の医学・医療の考え、対応では間に合わなくなってきました。各種の医療機関を社会資源としてシステム化し地域特性を活かした医療こそ国民の求めるものであることは常識となってきました。地元医師会からはじまって最後の10年間は千葉県医師会を勤めることが出来た4半世紀を省みて母校、同窓会のご支援とご指導に感謝するのみです。

学術賞

千葉大助教授

岡田誠治(自治医大昭60)



この度は、ゐのはな同窓会賞学術賞をいただき、心から感謝申し上げます。私は、昭和60年に自治医科大学医学部を卒業後、茨

城県において自治医科大学の義務である地域医療に従事致しました。茨城県立中央病院における初期研修の後、県西総合病院で当時の三宅和夫院長・石田裕臣院長のご指導のもと4年間内科医として勤務しました。この間に造血幹細胞の純化の研究を開始し、自治医科大学血液学教室にて後期研修後、ウィーンにある分子病理研究所(MAP)のErwin Wagner博士の下に留学し、AP-1遺伝子群による血球分化の制御についての研究を始めました。その後、3年間桂村国保沢山診療所に僻地医療に従事していましたが、自治医大の義務年限終了にあたり、大学できちんとした基礎医学を学びたいと考えておりましたところ、Wagner博士の友人である徳久剛史教授に声をかけていただきました。

平成8年5月より当時の医学部附属高次機能制御研究センター生体情報分野に助手として採用され、徳久教授に師事することとなりました。教室では免疫学の基礎を学びながら、自身のテーマである造血幹細胞の転写因子Transによる機能調節の仕事を始めました。教室は、種々の転写因子の機能を遺伝子改変マウスを用いて解析しており、常に生体における遺伝子の生理・病理について考えながら研究をしております。また、臨床各科からの大学院生や留学生も多いことから、毎日新たな発見があり、楽しく研究させていただいております。他教室との交流も盛んで、特に免疫発生・遺伝子制御・発生生物学とは毎週金曜日に共同で研究発表会を行っており、活発な議論がなされております。今回の受賞は、こうした多くの先生方からのご指導、ご助言の上に為し得たものであり、あらためて、感謝申し上げます。

私は昭和59年に国立旭川医科大学を卒業し、同年4月神経内科の平山恵造教授(当時)の門をたたきました。教室に入らせて頂いてから約3年後、のちに現教授となられた服部孝道先生の下で、神経因性膀胱の臨床研究に取り組むこととなりました。当時、自律神経障害による排尿の異常は、脊髄損傷以外ではほとんど検討されていなかったように思います。地下1階の窓のない検査室(これは今も同じですが)に週2回ほど終日こもり、泌尿器科の先生方と一緒に検査をしてまいりました。現在松戸市立病院にいらっしゃる村山直人先生、イギリスのSheffieldに留学中の山西友典先生には一から指導していただきました。一人の患者さんを検査する毎に、他の先生方とあれこれと熱く議論できたことが私の宝となっております。尿流動態検査(urodynamic study)所見と神経所見・画像所見を対比させながら検討いたしますと、前頭葉内側面、視床下部、大脳基底核とLysine系、中脳水道灰白質、脳幹(橋)被蓋部、脊髄側索、骨盤・陰部神経等がヒトにおいても排尿機能に大きく関わっており、高齢

このたびは、ゐのはな同窓会賞学術賞をいただき、心より感謝申し上げます。

千葉大助手
榊原隆次(旭川医大昭59)

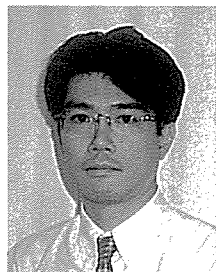


者の頻尿・尿失禁にも影響を及ぼしていると考えられます。最近、dopamine transporter SPECTや脳血流機能画像をもちいた検討、動物実験による橋排尿中枢のニューロン活動の検討を始めております。さらに治療薬の検討にも少しずつですが取り組めるようになりました。微力ですが、患者さんのquality of lifeを向上できればと思っております。服部教授をはじめ、一緒に検査をしている大学院生の内山君、日頃お世話になっている方々に、この場をお借りして心より深謝いたします。

この度はゐのはな同窓会賞学術賞を頂き、大変光栄に感じております。私はこれまで前立腺癌の発生・進展の分子機構について、臨床的側面を含めて研究を行ってまいりました。特にホルモン依存性癌である前立腺癌がなぜホルモン不応性(抵抗性)癌へと移行する

千葉大助手

鈴木啓悦(平2)



この度はゐのはな同窓会賞学術賞を頂き、大変光栄に感じております。私はこれまで前立腺癌の発生・進展の分子機構について、臨床的側面を含めて研究を行ってまいりました。特にホルモン依存性癌である前立腺癌がなぜホルモン不応性(抵抗性)癌へと移行する

のか?つまり《アンドロゲン感受性喪失IIホルモン抵抗性の獲得》は、前立腺癌治療の最大の障害の1つであり、私自身の研究テーマの1つであります。特にアンドロゲン受容体の異常が前立腺癌のホルモン抵抗性の獲得においてどのように関与するかに注目して研究を継続して参りました。今年6月の大宮での癌学会公開シンポジウムで本テーマについて発表させていただきました。

私が、前立腺癌の研究を開始いたしましたのは、平成4年に大学院医学研究科に進学した時からです。当時の島崎淳教授(現名誉教授)より最初に与えられたテーマが『前立腺癌組織におけるアンドロゲン受容体遺伝子異常の検索』というものでした。右も左も分からない状況の中、当時の大学院の先輩である佐藤直秀先生(現帝京大学市原病院講師)に分子生物学の実験の手ほどきを受けたり、

清野進教授の教室で短時間で技術の取得にお邪魔させていただいたりしました。

大学院卒業後は平成8年より2年間、米国Johns Hopkins 大学Oncology Center (Isaacs教授)に

ポスドクとして留学いたしました。Isaacs教授は前立腺癌の基礎研究の世界のリーダーであり、留学時には遺伝性前立腺癌遺伝子のクローニングの仕事などにも従事し、研究に対する視野を拡大することができたと感じております。平成10年に帰国後は、教室の伊藤晴夫教授の全面的な御支援を頂き、研究を継続させて頂いております。

このように今回の受賞の対象となりました仕事は多くの先生方のご指導・御協力のおかげであります。特に大学院の先輩で現在も指導いただいている教室の赤倉功一郎、市川智彦講師をはじめとした諸先生方にこの場をお借りしまして深謝いたします。今後この賞を励みと致しまして頑張つて研究を続けていきたいと思っております。今後とも御指導・御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

国立がんセンター東病院外科

中郡聡夫(昭58)



このたびはるのほな同窓会賞学術賞をいただき、心より感謝申し上げます。私は1983年に千葉大学医学部を卒業し、第二外科に入局いたしました。第二外科では肝胆膵外科と移植外科を専攻し、1991年助手となり、1999年4月からは柏市の国立がんセンター東病院外科に勤務しています。受賞しました研究の多くは、第二外科肝胆膵グループでの診療に基づいたものですので、第二外科の浅野講師、剣持講師を始め第二外科肝胆膵グループの先生方、大学病院4階病棟の看護婦さん、そして終始ご指導いただきました磯野可一教授(現学長)に感謝いたします。

今回受賞しました研究内容は、3次元画像とバーチャル内視鏡等の新しい膵画像診断の開発と、それに基づいた新しい膵区域切除である下膵頭切除に関するものです。私は、幸運にも1997年度の厚生省高度先端医療研究事業の海外派遣に推薦され、ハーバード大学医学部Brigham and Women病院放射線科手術計画研究室に留学する機会を得ました。そこでJolesz教授、Kikinis助教授のご指導のもとに、3次元画像とバーチャル内視鏡の研究を開始し、世界

に先駆けて膵臓のバーチャル内視鏡を報告することができました。バーチャル内視鏡とは、MRIやCTなどの2次元のデータをコンピュータ画像処理することにより内視鏡で見ているようなシミュレーション画像を作成する技術です。MRIやCT検査を受けるだけでミクロの決死圏のように体内を画像化できるようにするのが、今後の私たちの夢です。

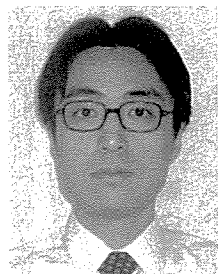
また膵管内乳頭腫瘍の外科治療においては、1991年から膵頭部の下方を切除する下膵頭切除を行ってきました。下膵頭切除などの機能温存手術を含めた膵管内乳頭腫瘍に対する私たちの手術成績は、5年生存率が90%以上であり良好な成績といえます。その治療成績と下膵頭切除の術式は1991年と2000年のAmerican Journal of Surgeryに報告させていただきました。

今後肝胆膵癌を始め胃癌など消化器癌の外科治療に、微力ではありますが全力を尽くしていく所存です。のほな同窓会の先生方のご指導、ご協力をよろしくお願い申し上げます。



千葉大講師

中澤 健(平4)



この度、るのほな同窓会賞学術賞を受賞することができ、心より感謝申しあげます。私は平成4年に千葉大学医学部を卒業し、耳鼻咽喉科学教室にて2年間の臨床研修を終えた後、千葉大学大学院医学研究科へと進み、生理学第一教室の中島祥夫教授の門をたたきました。発声の中枢制御機構に興味を持ち研究を行っていた折、米国Rockefeller

大学、Albert Einstein 医科大学へ留学する機会に恵まれ、喉頭・呼吸関連の神経科学領域をさらに掘り下げて研究することができました。

喉頭は、呼吸以外にも、発声、嚥下、嘔吐といった実に多くの機能を有しています。これらの運動の際、喉頭筋はそれぞれ異なる活動パターンを呈するので、脳幹の神経活動を調べていくことにより、このような活動パターンが脳内で生成される過程や、その局在、また互いの関連性に

ついて、少しずつ明らかになってきました。今後、発声障害や嚥下障害などの病態解明に貢献できるよう、さらなる研究を進めていきたいと考えております。

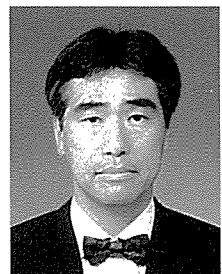
また研究を行ってきて、脳とは何かという問題を常に考えるようになりました。それは、脳を調べるという研究の延長線上に果たして脳の本質的な理解が見えてくるのか、といった素朴な、しかし難しい問題です。もっとも、これは喉頭運動の脳内制御のような問題とは全く関係ないものかも知れませんが、神経科学に携わる限り、今後もずっと考え続けていくことになるだろうと思います。

神経生理の研究はその性質上、決して一人ではなし得ないもので、今回の受賞に結びつく研究も多くの方々との共同研究によってなされました。中島祥夫教授をはじめ第一生理の先生方、耳鼻咽喉科の先生方、また留学先の方々には多大なご支援をいただきました。この場をお借りして深く感謝の意を表したいと思います。今回の受賞を励みに、一層の努力を重ねる所存です。今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

「自殺遺伝子治療」とは、腫瘍細胞への薬剤代謝酵素遺伝子の導入により、本来低毒性の薬剤が活性化され、腫瘍細胞を死に至らしめる治療法です。ガンシクロビルという抗ウイルス剤は本来哺乳類の細胞では毒性が低いのですが、単純ヘルペスチミジンキナーゼという酵素により活性化されるので、この遺伝子が導入された細胞は死に至ります。すべての腫瘍細胞に遺伝子を導入することは不可能ですが、動物実験では10%程度の細胞に導入されれば治癒することが示され、「バイ

浜松医大教授

難波宏樹(昭54)



2000年という区切りの年に、第5回るのほな同窓会賞学術賞をいただき、心より感謝申し上げます。昨年4月より浜松医科大学の脳神経外科を担当させていただいておりますが、それまでの11年間は千葉県がんセンターで悪性脳腫瘍の臨床と研究を行ってまいりました。本研究は千葉県がんセンターで行われた研究です。

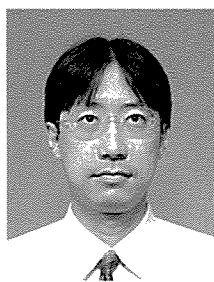
「自殺遺伝子治療」とは、腫瘍細胞への薬剤代謝酵素遺伝子の導入により、本来低毒性の薬剤が活性化され、腫瘍細胞を死に至らしめる治療法です。ガンシクロビルという抗ウイルス剤は本来哺乳類の細胞では毒性が低いのですが、単純ヘルペスチミジンキナーゼという酵素により活性化されるので、この遺伝子が導入された細胞は死に至ります。すべての腫瘍細胞に遺伝子を導入することは不可能ですが、動物実験では10%程度の細胞に導入されれば治癒することが示され、「バイ

スタンダー効果」と呼ばれています。遺伝子導入細胞が細胞死に陥る際に周囲にある遺伝子非導入細胞を巻添えにするためと考えられております。今回の研究は、自殺遺伝子を導入した腫瘍細胞を治療用細胞として用い、バイスタンダー効果を利用してラット脳腫瘍を治療するというもので、従来のウイルスベクターを用いた方法とは異なった新しい自殺遺伝子治療です。最近、神経幹細胞の研究が盛んですが、治療用細胞として神経幹細胞を用いる方法も現在検討中です。

臨床医として現場で感じた問題点を研究室に持ち返り、また臨床現場にフィードバックすることは理想的な研究の在り方だと思えます。これまで悪性グリオーマに対し、さまざまな治療努力を行いつつも敗北してきました。その度に研究に一抹の夢を託し、また周囲の人々の協力を励みもあつてここまで続けてくることができました。まさに地を這うゲリラ戦のような研究ですが、少しずつでもゴールに近づいていると信じられることが癌の臨床を続けてゆくエネルギーになってきたと思います。本研究は千葉県がんセンター病理研

究部長田川雅敏氏との共同研究であり、研究局長の崎山樹先生始め千葉県がんセンターの皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。

社会保険船橋中央病院内科
山口浩史(昭62)



このたびは、名誉あるものはな同窓会賞を頂き、心からお礼申し上げます。

私は昭和62年に千葉大学を卒業後第3内科に入局し、故稲垣義明教授の下で循環器病を学び始めました。初期研修終了後は、小林智助手と共に不整脈の診療および研究に従事しました。この期間にイオンチャネルに働く抗不整脈薬の作用に興味を持った事をきっかけとして、薬理学の中谷晴昭教授にご指導を頂きイオンチャネルの基礎研究を開始しました。その後平成8年から11年まで、増田善昭教授、齊藤俊弘助教授のご理解を得て米国オハイオ州立シンシナティ大学医学部、Arnold Schwartz 教授のもと

へ留学し、心筋カルシウムチャネルの研究を行なう機会を頂きまして、主にこの期間の業績を評価して頂いた事が今回の受賞につながりました。研究内容は、チャネル付属サブユニットによるチャネル複合体の細胞内輸送と機能的修飾、チャネル電位センサーの構造・機能連関、といった非常に基礎的な内容から、カルシウムチャネルトランスジェニックマウスの機能解析、という臨床医学に関連の深い内容までを含んでおり、特に

前者は最近Johns Hopkins 大学で計画されている心不全の遺伝子治療(カルシウムチャネル付属サブユニット遺伝子の導入)の理論的なバックグラウンドになりました。また後者については、心臓選択的にカルシウムチャネルを過剰発現したマウスが拡張型心筋症に類似した心不全をきたす事がわかり、心臓病の予防と治療にいくつかのヒントを与えるものと思えます。千葉大学卒業後、同窓会の多くの先輩方のご指導、ご助言を頂く事ができた幸運があつてこそ、今までの程度の成果を得る事ができたと思っております。今回の受賞を大きな励みにして、今後もさまざまな循環

器病の病因の解明と、有効な治療法の開発に努力し、また患者さんへフィードバックしてゆきたいと思えます

同窓会 員 著 書 の 紹 介

岡田淳一(昭57) 著

「コンパクトMRI シリーズ Vol.1

MRI 正常解剖と原理」

(株)ベクトル・コア社 定価4,700円



成田赤十字病院の岡田淳一放射線科部長が、このたび本書を出版しました。核

磁気共鳴映像法(MRI)は、診療に欠くことのできない検査法として今や広く普及しています。また、最も進歩が速い分野の一つです。本書はコンパクトな大

きさで、MRI検査法の初歩的な解説に続き、全身の正常MRI像とその説明が記載されています。

医師、放射線技師、看護婦、事務職員が良好なチームワークを保たなければ、MRI室の効率的な運営はできません。医師と放射線技師からはMRI撮影部位を決める時や読影に役立つ

ので、一層のご指導、ご鞭撻のほどをお願いいたします。

成田赤十字病院院長 加藤 誠(昭47)



高山直秀(昭43) 著

「ヒトの狂犬病―忘れられた死の病」

時空出版 定価2,000円



狂犬病は発病してしまえば、ほぼ100%死亡する人獣共通ウイルス感染症である。

日本では昭和32年以降狂犬病の国内発生の報告はない。このため現在の日本では一般の人々ばかりでなく、医療関係者や保健関係者も狂犬病を忘れ、問題にすることがない。しかし、一步海外に出れば、狂犬病発生のない地域は少数であり、アジア、アフリカ、中南米など多くの国々で今なお多数の狂犬病の犠牲者が発生している。日本で最も発生する可能性が高い狂犬病は、日本からの旅行者が海外で狂犬病動物に咬まれ、帰国後に発病するヒトの輸入狂犬病であろう。毎年の出国者が増え、いつ輸入狂犬病が発生しても不思議ではない。また、イヌへの狂犬病ワクチン接種率が50%未満である現状では、狂犬病感染動

物が日本に持ち込まれた場合に狂犬病流行の発生を阻止することは困難である。海外で狂犬病危険動物に咬まれて帰国した人々に狂犬病ワクチンを接種するうちに、狂犬病をめぐる日本の現状を紹介し、狂犬病そのものへの認識を新たにしてもらう必要を感じて本書を著した。狂犬病を身近に感じてもらうために、できるだけ多数の症例報告を引用し、また事例も多く挿入した。狂犬病は治癒させえない疾患ではあるが、予防は可能である点を強調して、狂犬病ワクチンおよび狂犬病曝露後発病予防にも多くの頁を割いた。

本年は日本での狂犬病予防法制定50周年にあたる。本書が狂犬病そのものを、また狂犬病予防の重要性を再認識する助けとなり、日本での狂犬病根絶のために活動された先輩諸氏の労苦に想いをよせる契機となれば幸いである。

高山直秀(昭43)



関根 博 (昭26) 著

「開業医だからできること」 リヨン社

二見書房 定価1,500円



関根博君は私の敬愛する
畏友の一人である。

氏は学生時代(昭和22年入学)戦後の混乱期にあつて、社交ダンスが盛になると学内に始めてのジャズバンドを作り、その後現在のN響のメンバーとなるなどなかなかモダンな人であったが、卒業後聖路加国際病院にて6年間勤務した後、父上が大きな精神病院の院長であつたにもかかわらず東村山市に於て診療所を開院。

現在73才であるが元気に第一線で、診療・講演・執筆と八面六臂の活躍をしておられる人である。

医学部を卒業して医師となると研究者として教職につく人、勤務医として最終的には病院長となる人、更には開業して地域医療に進む人と分れるが、あえて若いうちから開業の道を選んで地域医療に盡くすのみな

状態である。

本書はこれからどの方向へ向わんと考えている若き医師への指針になるもので、「若者よ開業をめざせ」という項にある通り、あと14年もすると68〜70才の開業医集団が80才を越えて退職

十束支朗 (昭30) 著
「ボケを知り、ボケとつき合う」
成星出版 定価1,300円

高齢化が大変なスピードです。今日、痴呆老人の数は増加しており、多くの人々にとって痴呆は身近で、しかも深刻な問題になっている。本書は本学昭和30年の卒業で、長らく山形大学医学部精神神経科教授をされ、現在日本社会事業大学大学院教授の十束支朗氏が書かれたものである。書名からもわかるようにボケすなわち痴呆についての一般向けの解説書であり、一読し、実に読みやすく分かりやすい本であることに驚いた。内容は、人はなぜボケるか、ボケの症状とは、ボケの原因となる病気とは、痴呆症老人はどのくらいいるのか、痴呆症老人を診察する手だては、ボケの治療はどこまで進んでいるか、痴呆症老人をケアするには、

し、現在の開業医集団がなくなり、戦力が相当減ってくる。

「若者よ開業をめざせ」
若き医師への必読の書として推薦するものである。

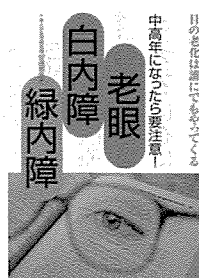
秋葉照夫 (昭26)

痴呆症老人の福祉は、ボケは予防できるか、中高年をどう生きるか、の全部で十章に分けて書かれている。本書に一貫して流れるのは、著者の痴呆老人に対する深い愛情ではないかと思われる。それはアルツハイマー病の脳に現れる老人斑と著者が米国のクリスマス島の時期に見かけた月桂樹の冠とが似ていることから、

「女性の長寿とアルツハイマー病は、人類の繁殖に貢献した女性に対する神の思召しではなからうかと思ひます。それが人間への神のいたづらなのか寵愛なのかは、受け止める人によって違いがあることでしょう」とか「ボケが進んで高度になるほど、奇行が多くなります。もちろん寝たきりになる人もいます。異常な行

安達恵美子 (昭37) 著

「老眼 白内障 緑内障」 新星出版社 定価1,200円



忌憚なく申し上げれば、これまで私は、書くものといえは学術論文ばかりで、このような一般向けの本を書いたことがないのです。でも、考えてみれば、この本に書くべきことは、毎日患者さんに接しながら、そのたびにお話していることをまとめることです。

私の勤めている大学病院の眼科には、乳幼児から高齢者まで、あらゆる年齢の方がお見えになります。毎日、各年代の方の目の病気を診させていただいてきたのです。そこでは、各患者さんにはどう説明すればいいのか、それは経験的にわかってはいるのですが、なにしろ外来の混雑の中ですから、思う存分の説明はできませんでした。

大学病院には、そのほかに学生の教育や研究教育もありますから、ともすれば論理を優先させていたのか

もしません。今回は、本書の執筆にあたって、自らの姿勢を正す意味でも、専門知識のない一般の人たちにもわかるように書いてみたいということで、執筆を引き受けさせていただきました。

しごとが終わって夜半に書き始めるのですが、この作業は思ったよりも難しく、書いた原稿を家族や秘書さんに読んでもらって、書き直しました。わかりやすく平易にと心がけての執筆でしたが、それでも、専門用語を使わなければならなかったり、各章ごとの内容のオーバーラップに悩んだり、私にとっての一大経験でした。

安達恵美子 (昭37)



服部孝道 (昭42)

韓国語に訳され、韓国でも出版された。



教室だより

病理学第二講座 (病態病理学)

平成11年10月1日に近藤洋一郎先生(現名誉教授)の後任として着任し、本教室をお預かりすることとなりました。以前ゐるのはな同窓会報第123号では自己紹介をさせていただきました。

変感謝しております。また帝京大学市原病院の長尾孝一教授(昭36)、菅野勇助教授(昭47)、千葉県立こども病院の堀江弘部長(昭44)、千葉県立がんセンターの武内利直部長(北大昭54)にもお世話になっております。

理學総論、病理学各論、学生(BC)、病理学実習を分担し、4年生の基礎配属を受け持ち、病理学が臨床にも直結しており、大変やりがいのあるものであることを伝えるべく努力しております。本年4月には本学卒の栃木直文君も新卒で入室してくれました。また腫瘍に対する化学療法を得意とする内科畑の石黒洋君(金沢大平3)も入室してくれ、教室に活気をふきこんでくれています。いまなお剖検

公衆衛生学講座 (地域医療学)

教授 石倉 浩

の必要な症例は多く、医療水準の向上には良質の病理医の存在は不可欠です。我々と一緒に外科病理学の道を歩む若人の育成にも全力を尽くす所存です。

スタッフ、大学院生とも若く、立ち上がってきたばかりの教室です。ゐるのはな同窓会の諸先生方にはよろしく御指導、御鞭撻を頂きますようお願い申し上げます。

に關する検討、喘息児のピークフロー等による急性影響評価方法の検討を進めております。実験研究では生理学第二講座のご協力をいただき、マウスを用いて主要な大気汚染物質である二酸化窒素及びオゾンの曝露実験を行っております。

保健分野を中心に活動しております。近年のディーゼル車増加に伴う大気汚染をはじめとして、環境保健分野の課題は山積みしております。また、高齢化社会を迎え、保健医療福祉に関する研究・教育面においても教室の果たすべき役割は大きく、少ない教室員でさらに一層の努力をしていきたいと思っております。ゐのはな同窓会の先生方には、今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

助教授 島 正之

開催予定の行事をお知らせ下さい

学会、研究会、ゐのはな会、クラス会など種々の行事開催予定とその内容について同窓会事務局へお知らせ下さい。本会報に掲載致します。なお、本会報の発行月は1月、5月および9月です。

ゐのはな同窓会への寄附

- 井出源四郎(昭19) 七万一千七百八十八円
- 国井 光智(昭21) 十七万九千九百九十一円
- 佐藤 甫夫(昭35) 五十万円

当教室は故馬杉復三教授による糸球体腎炎(いわゆる馬杉腎炎)や故岡林篤教授の遷延感作実験に基づく免疫病理学の発展、そして近藤教授の手がけられた肝細胞癌の診断病理など世界的な業績を数々あげて参りました。現在、教室を運営するにあたり人体病理学を基盤として実験、研究を行っていくことを目標とし、「リサーチマインドをもった病理医」の育成をめざしております。

本年6月からは岸本充助手(北大昭63)をスタッフに加え、加藤佳瑞助助手(平4)、永井雄一郎助手(平5)とともに、以前から手がけていた腫瘍の異分化に関する研究、腫瘍を主体とした実験腫瘍及び婦人科病理に関する研究を行っていく所存であります。毎週木曜日には研究成果を発表する機会を作り、また外科病理、実験病理に関する原著論文を読む抄読会を行っております。

公衆衛生学講座は昭和28年に開設され、柳澤利喜雄教授、吉田亮教授により主宰され、安達が3代目教授として平成2年に就任しました。現在、教授、助教授、助手各1名の教官3名と、技官、事務官各1名、大学院生3名(他に呼吸器内科の大学院生1名)、研究生2名で教育・研究を行っております。学部教育としては公衆衛生学(総論、各論、社会医学実習)と基礎配属を、大学院専攻科目としては公衆衛生学と大気汚染学を担当しています。

学部教育の公衆衛生学総論は2年生の後期から始まります。少しでもpublic health mindedな医師となつてもらうことを目的として、予防医学の重要な手法である疫学を中心に講義しています。公衆衛生学各論は3年次にあり、高齢化に伴う疾病像の変化に対応して、生活習慣病、高齢者福祉、リハビリテーション、学校・母子保健、衛生行政、食品衛生等について、各界で活躍中の教室出身の非常勤講師を中心に講義を行っております。本年度からはEvidence Based Medicine (EBM)に関する講義も行う予定です。このように講義では幅広い分野を扱っておりますが、衛生学と内容が重複しないように話し合っております。

研究活動は、大気汚染の健康影響と地域保健医療に関する研究を中心に展開しています。大気汚染の健康影響については、疫学及び実験の両面から研究を行っています。疫学研究では、千葉県及び東京都の小学校をフィールドとして呼吸器症状調査と肺機能検査を継続して実施し、自動車排出ガスが呼吸器・アレルギーに及ぼす影響について検討しており、主要幹線道路の沿道部に居住する学童は気管支喘息の発症率が高率であることを明らかにしました。また、室内空気汚染、受動喫煙等の関与についても着目するとともに、大気汚染の健康影響指標として血清IgEを中心にBiomark

近年の学会活動では、島が平成9年に「大気汚染による健康影響評価手法に関する国際セミナー」で肺機能検査を担当し、平成11年には日本衛生学会総会パネルディスカッションで「大気汚染の健康影響に関する疫学的研究―現状と今後の課題―」と題して講演を行いました。

安達は千葉県医師会副会長、千葉県医療審議会専門委員、千葉県自然環境保全審議会委員をはじめ多くの社会的活動を行っています。島は環境庁のディーゼル排気微粒子リスク評価検討会委員、環境保健サーベランス・局地的大気汚染健康影響検討会委員として環境

本年4月からは附属病院病理部の運営を任せられ、当教室出身の尾崎大介講師(弘前大平3)及び現教室員と共に日々検体を鏡検しております。その際病理学第一講座の張ヶ谷健一教授、肺病研究施設・病理研究部門の大和田英美教授には御指導、御助言をたまわり大

教育面では、第一外科、第一内科、泌尿器科、産婦人科をはじめとする各科及び海外からの留学生を大学院生として受け入れ、病理診断、剖検、研究と一緒に行っております。また学部学生に対しては3年生の病

第3回アジア・オセアニア アンドロロジー学会を主催して

泌尿器科学講座 教授 伊藤 晴夫

アジア・オセアニア・アンドロロジー学会はこれまで2回開催されており、第1回は1982年に中国で、第2回は1986年インドで開催されました。第3回にあたる今回は、当教室の主催にて第19回日本アンドロロジー学会学術大会とジョイントする形で、5月24日から5月27日の4日間にわたって幕張メッセ国際会議場にて開催されました。アジア・オセアニア諸国を中心に約500名の参加者を得て、盛会のうちに会を終了させることができました。

アンドロロジー (Andrology: 男性学あるいは雄性学) はアンドロゲン (男性ホルモン) の接頭語と同じ「アンドロ」に由来する用語であり、雄性生殖にかかわる基礎的研究分野と疾病にかかわる応用研究分野を包含しており、研究領域は文化人類学、行動生物学、動物学、生態学、生化学、分子生物学、薬学、獣医学、内分泌学、小児科学、産婦人科学、泌尿器科学など、多岐の分野にわたっています。したがって、その領域

トいたしました。本コースでは、男性不妊症の外科的治療の世界的なパイオニアである米国セント・ルイス不妊センターのSilber博士の総説的な講演にはじまり、アンドロロジー領域の外科的側面について8つの講演がビデオを交えながら行われました。

三、本学会では、合計5つのシンポジウムが企画され、それぞれ各領域のエキスパートによる素晴らしい講演が相次ぎました。シンポジウムのテーマは『各国における前立腺癌の疫学と組織学的分類』『男性生殖における環境の影響』『妊孕性の分子生物学』『勃起障害』『精細胞の分子生物学的研究、培養と移植』と現在のアンドロロジーのホットな話題を取り上げました。四、中国、インド、韓国、オーストラリアなどのアジア・オセアニア諸国をはじめ世界各国から指導的立場にある方々をお願いして、8つの特別講演が行われました。まず、Asian Society of Andrologyのpresidentである中国のQian博士による『高齢者男性のホルモン欠乏』に始まり、米国Population CouncilのSundaram博士による『新しい男性避妊薬』、米国ク

リーブランドクリニクのAgarwal博士による『癌患者の精液バンク』など、世界をリードする演者たちによる迫力ある講演が展開されました。またこれらの3博士による講演は、アジアアンドロロジー学会より、それぞれVishwa Nath Oration、Pierre Crabbe Oration、M. C. Chang Orationとして表彰されました。

五、ランチョンセミナーとして、米国Johns Hopkins大学のIsaacs教授による前立腺癌に対する全く新しい治療法についての講演と、札幌医科大学の熊本悦明名誉教授によるウイルス性行為感染症の最近の状況についての講演をしていただき、共に多くの聴衆が会場に詰めかけました。

六、前述した講演の他に、今回はアジア・オセアニア諸国より集まった合計138題の一般演題をポスター形式で発表いただきました。ポスター会場でも2時間の討論時間を設け、活発な議論



がなされました(写真1)。また最終日には特に優れた発表をされた5名の方に、学会本部より閉会式の際に賞を授与させていただきました。受賞者ならびに演題名は以下の通りでした。Natar R. Kalla (バンジャフ大学) (Induction of apoptotic death in the seminiferous tubules of pyrimethamine treated mice.)、Chen Xu (上海第2医科大学) (Ureaplasma urealyticum infection and male infertility.)、Du Geon Moon (高麗大学) (Effect of bisphenol A on the erectile tissues of experimental animals.)、Hiroshi Ohta (大阪大学) (Testicular germ cell transplantation into seminiferous tubules.)、Naohide Sato (帝京大学) (Introduction of KAI-1 gene suppressed metastatic ability of LNCaP human prostate cancer cells in SCID mouse model.)。

七、開会式およびBanquet (写真2)の会場では、互いに言葉も宗教も習慣も異なる世界各国からの参加者が、親睦を深めあう光景が数多く見受けられました。宗教や習慣上から飲食物の提供にも心配りさせていただきました。情報交換などの学術的発展のみならず、国際親善についても貢献できたものと自負しております。

以上の会議内容は、International Journal of Andrology 第23巻のsupplement 2およびInternational Journal of Urology 第7巻のsupplementとして発行致しました。数に限



りはありますが、ご希望の先生には送付しておりますので、事務局(千葉大学医学部泌尿器科教室内)までご連絡いただければと存じます。

最後になりましたが、本会議の開催に際しまして、御指導、御尽力を賜りましたのは、同窓会の皆様にあらためて深甚なる感謝を申し上げます。また千葉大学より多額の補助金をいただきました。磯野可一学長をはじめ関係した皆様方に心より御礼申し上げます。

名誉教授近況

奥田 邦雄



退官してから13年がたちました、早いものです。朝目をして「さて今日は何をしようか」と考えるような生活はしたくない、医学の進歩に取り残されたくないと思いついて、大学外で臨床研究を続けました。段々原著が書けなくなり、代りに総説著書が増えてきました。それでも4年前にはLancetに原著を、又他の雑誌に原著を毎年一編以上書いています。それとは別に英文の専門書を退官後6冊国際出版しました。現在800頁の「肝病態生理と画像」という教科書をOxfordに印刷中です。

医学の先端について行くには原著雑誌の編集にかかわるのが良いと考え、現在Blackwell 社出版のJ.Gastroenterol. Hepatol. という原著雑誌の編集長の仕事を続けております。それは別の米國肝臓学会出版のHepatology G Assoc. Edit

のを11年間つとめ、同学会から表彰されDistinguished Service Award をいただきました。故Popper教授に教えられました。雑誌の編集長は人にうらまれても感謝される事のない仕事で、将来がある者はやるものではない」と。それとは別に12の国際雑誌のEditorのリストに名が入っているの、毎週のようにreviewの依頼がきます。そのような関係で二重投稿を時々発見、本人に通告して採用を没にするのは当然ですが、或時それがうまれ、脅迫状を受けました。神戸大学外科の論文で基礎教室がからんでいたが、日本消化器学会の倫理委員会に報告したところ、それが洩れ匿名の外科医から「奥田およびその家族に身体的危害を与える」という手紙がきました。千葉県警に相談、指紋をとったりして相手を調べたが、県警は無能で不成功に終わりました。論文の審査が長引き印刷が遅れるとその苦情は編集長にきます。私が責任者であるこの雑誌は学会誌でないの、またアジア太平洋地域に基盤を置いているので実務担当のEditorは6つの国に散らばっており、距離の関係で編集会議を度々開く事ができず、やむなく臨時会議はTele-conferenceでやる事になりました。即ち千葉、東京、シドニー、メルボルン、バーミンガム、ニューデリー、台北、香港のSenior Editorと出版社が一斉に電話で話し合い、電話料は出版社が支払う。但し千葉4 p.m.だとシドニーは8 p.m.、バーミンガムは明け方という時間関係です。このTele-conferenceの司会も私がつとめなければなりません。この雑誌は学会が出しているのではなく、収益があるので、出版社にその50%を出させてTrust Fundを香港に設置、消化器、肝臓病の進歩発展の為に使う事にしました。Fundは数万ドルに達したので、先般の福岡で開かれた国際肝臓学会アジア太平洋肝臓学会合同会議でもYoung Investigator Awardとして2000ドルを供与しました。

代にはやらなかった講演の後にはやらなかった講演の後の観光をする様にしています。昨年11月は第1回イラン消化器病学会に招聘され8日間イスラムの歴史と文化に觸れ、色々学ぶところがありました。現在の体調ではかなりの労働にも支障なく、正月休みは友人と豪州のバリアリーフに行き、生まれ始めて始めてスキューバダイブに挑戦、20メートルの海底に潜りました。退官後始めた硬式テニスはさっぱり上達しませんが、有難い事に学生が相手をしてく

れています。バイオリンの方も2回のレッスンを受けていますが、それとは別に日曜午後は千葉市交響管弦楽団の練習があり、時間的にきゅうくつな生活を送っていますが、練習は休まないよう努力しています。この秋はブラームスの第3番をやります。お陰で今は食べたい物を食べ、飲みたいだけ飲み(最近は二日酔い注意しています)、毎日時間が足りないような(充実した?)生活を送っています。

「一九九六年ゲッティンゲン大学退役記念会」の記

高野 光司 (昭33)

私は1996年3月31日ゲッティンゲン大学医学部病態神経生理部長を解任になった。退官と書かないのは、私が終身教授だからである。それまでは大学のMilitariedであって、教育と研究の義務と権利、そして選挙権があったのが、Angelhorstになって、教育と研究の権利だけが残った(研究は研究所の空間を明け渡したので実際には出来ない)。今でも、提出中の学位論文や教授資格試験論文を読んで、必要なら、アインヴァントを唱

それはいいとしても、退役の行事に同窓の方の誰一人にも出席いただけなかったことは、願うのが無理というものが、淋しかった。私の最後の勤務日は、1996年3月29日の金曜日だった。普通は、その日に学長室に呼ばれて、感謝状を手渡され、同じ運命にある同僚数人とコーヒーとともに暫時歓談するようだ。私は、音楽好きのシュライバー学長と計らって、この日の夕方7時から、アウラ(講堂)で、記念音楽会を開催することにした。アウラは大学の100年祭に、最後の大英帝国とハノーヴァー選帝侯を兼ねるウィルヘルムIV世の寄付によるもので、音響効果がいすばらしい。拡張すると400席、この日は復活祭休暇の最中出てももらえない人も多かったが、それでも300人位の人にレベルの高い音楽を楽しんでもらった。

この講堂では、幾多の先輩諸君やノベル賞級のお客が講演をした。井出学長(当時)も大学250年祭のお客の一人として、演壇に立たれた。

年5回の「アウラ・コンサート」には一流の音楽家(二例、最盛時の東京四重奏団)が演奏する。長女も一夜このシリーズでソロ・アーベントを持った。第50回ドイツ生理学学会の開会式には、当時13歳と10歳の娘達が、プロのセリスト、ヴィオラと演奏をした。お世辞としても「今回の生理学学会の第一の成功は音楽だった。」

と云ってくれた同僚もいた。ヘンレ・メダル授与式には、下の娘はフライブルガー四重奏団を率いて演奏した。(シュライヒェ、ループのヘンレは当大学教授だった



右より
シュテファン・フォーク (二女の夫・フォークラー四重奏団)
シュテファン・フェーラント 長女 弥生 二女 えりか

退役記念会には娘たちに、
フォーク・四重奏団のセロ
(私の娘婿、ベルリン音大
教授)とヴィオラが加わっ
た。二人とも当時すでに世
界的な演奏家であった。だ
から、私の記念会というよ
り、音楽を聴きにに来てく
れた人のほうが多かったの
かもしれない。

ず。学生時代に、ウィー
ンのオペラ歌手の練習の伴奏
をしていたというクチュエ
ラ経済学部長は
「貴君の退役記念会は、近
来まれな、すばらしいもの
だったね。今後こんなこ
とは当分あるまい。」
と語ってくれた。

著書「ゲッティンゲン便
り」が絶版になりそうです。
今年中にたぐさんの方が買っ
てくださると第二刷が出ま
す。よろしくお願い申し上
げます。
写真は1989年3月、光司の
ゲッティンゲン大学教授25
周年、定年による部長職解
任記念音楽会の最後の場面
会場は大学創設100年祭
(187年)に建てられたアウ
ラ

作品1の1
シューマン
ヴィオラとピアノのための
「メルヒェンの絵」作品113
ブラームス
ピアノ4重奏曲、ト短調
作品25
演奏者は、
ピアノ
弥生・高野一ベック
ヴァイオリン
えりか・高野一フォーク
ヴィオラ
シュテファン・フェーランド
セロ
シュテファン・フォーク

法士を配置したりハベリ室
寝たまま入浴できる特殊浴
槽を設置、スタッフ一同患
者は早くご自宅へお帰しす
ることを目標に頑張ってお
ります。
この病棟では、毎日のリ
ハビリの他、年間の行事予
定を計画表に作成、春(4
月)お花見、夏(7月)七
夕祭り、秋(9月)お茶会
(お月見)、冬(12月)クリ
スマスパティー、その他
絵画療法や誕生会などを実
施しております。

いしている「指定介護支援
事業者」・予防医学を主と
して担当している、財団法
人 柏戸記念財団(財団組
織は財団本部、長洲柏戸ク
リニック、小倉台柏戸クリ
ニック、ポートスクエア柏
戸クリニック)
主な業務は、昭和38年か
ら開始した出張検診、集団
検診、来院検診、宿泊、日
帰りドック、医学の研究に
尽くす医師の皆さんに、医
学奨励金の贈呈等行ってお
ります。

君津中央病院
人事異動
福山悦男(昭36)院長
(病院長代行兼地域医療
センター長より)
佐藤行一郎(信大昭42)
地域医療センター長
(医務局長より)
磯部勝見(横浜市大昭43)
医務局長(医務局次長より)
田中寿一(昭43)医務局次
長(地域医療センター副
センター長より)

病院紹介

柏戸病院の歴史と現況

病院長 柏戸正英(昭33)

柏戸病院は、常勤職員162

名そのうち「千葉大学あ

の病も気も共に治すのが医師

の皆様の役に立っております

平成3年に設置したMRI、

歩む中核病院として、70余

124号で、左記の誤りが

「はな会」会員は9名で頑張

の本務」と言うこと、それ

が国に結核予防の為にB

れ、柏戸病院は現在に至

平成10年に更新したヘリカ

は、千葉市全域を訪問先と

ありました。訂正しお詫

ておりますが、開院は昭和

は茶の間のような病室、患

を国に結核撲滅に大き

開院以来72年の歳月が流

は、千葉市全域を訪問先と

は、組織的な

び申しあげます。

3年1月16日当時は附近一

は茶の間のような病室、患

を国に結核撲滅に大き

開院以来72年の歳月が流

は、千葉市全域を訪問先と

は、組織的な

び申しあげます。

帯、田圃と畑であった千葉

は茶の間のような病室、患

を国に結核撲滅に大き

開院以来72年の歳月が流

は、千葉市全域を訪問先と

は、組織的な

び申しあげます。

市長洲町2丁目に千葉医大

は茶の間のような病室、患

を国に結核撲滅に大き

開院以来72年の歳月が流

は、千葉市全域を訪問先と

は、組織的な

び申しあげます。

の教授でありました、柏戸

は茶の間のような病室、患

を国に結核撲滅に大き

開院以来72年の歳月が流

は、千葉市全域を訪問先と

は、組織的な

び申しあげます。

留吉により「柏戸内科病院」

は茶の間のような病室、患

を国に結核撲滅に大き

開院以来72年の歳月が流

は、千葉市全域を訪問先と

は、組織的な

び申しあげます。

の名称で開業致しました。

は茶の間のような病室、患

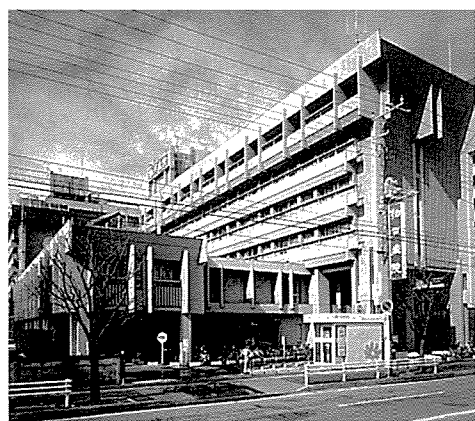
を国に結核撲滅に大き

開院以来72年の歳月が流

は、千葉市全域を訪問先と

は、組織的な

び申しあげます。



注意下さい

千葉大学医学部同窓医人
名鑑(文教出版)係と称し、
氏名、勤務先等を記入する
調査カードが郵送されてお
ります。これは本同窓会と
は何ら関係ありません。
次回の会員名簿発行は、
2003年です。

千葉大(小児科)
↓東京大(小児科)
千葉県市職員異動
佐倉病院↓佐原病院

高梨さやか

卒業生進路

訂正とお詫び

124号で、左記の誤りが

ありました。訂正しお詫

び申しあげます。

各地ののはな会

だより

東京ののはな会便り

東京ののはな会総会

6月25日(日)東京ののはな会総会が椿山荘において開催された。本年度は千葉大学医学部同窓会総会が当支部の担当で同日にひきつづいて開催されることになったため参加者はやや多く83名であった。

午後1時から新田実男顧問の司会で行われ、長澤仁一副会長の開会の挨拶、ついで貫洞一夫会長の東京ののはな会の歩みと今後の展望について御話があった。その後次のように議題が討議された。

先づ地域の支部組織が合理的に再編成された。会員数の配分、地域的条件を加味して、墨東を城東に合併して「東部地区」とし、城西を二つのブロックにわけ、世田谷・目黒区を城南に加えて「城南地区」とし、六地区にわけることになった。(表1)

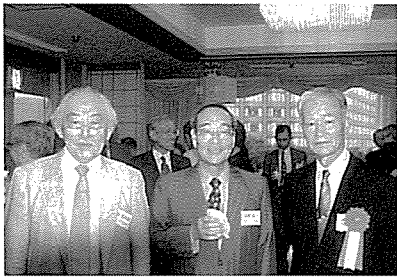
次に本年度は役員改選期であり、新役員が選出された。貫洞一夫会長が勇退されるため、名誉会長に推薦

されることになった。後任として長澤仁一副会長が会長に推挙された。副会長は新たに関根博先生が就任され、理事は各地区の担当理事8名および勤務医部会から新たに7名が選出された。(表2)

その他平成11年度の決算および12年度の予算について会計担当の赤畑正光先生から報告があり了承された。また名簿・会報の発行につ

表1 支部組織の改定 (平成12年6月)

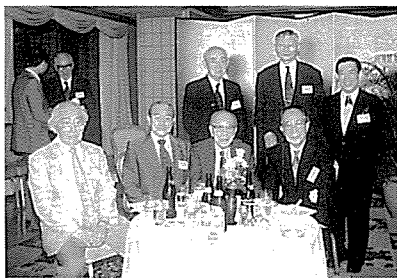
i) 中央地区	千代田・中央・台東・文京・港区
ii) 東部地区	A) 墨田・江東・荒川区 B) 足立・葛飾・江戸川区
iii) 西部地区	新宿・中野・渋谷・杉並区
iv) 南部地区	A) 世田谷・目黒区 B) 品川・大田区
v) 北部地区	北・練馬・板橋・豊島区
vi) 三多摩地区	北・西・南多摩 その他



いてそれぞれの担当者から本年度の予定について説明されたが、これらについては後日開催予定の新役員会で改めて担当者を決めた上で実施していくことになった。(小幡裕・昭28)

表2 東京ののはな会役員 (平成12年6月)

名誉会長	会長	副会長	顧問	地区担当理事
名尾 良憲 (昭13)	貫洞 一夫 (昭22)	長澤 仁一 (昭24)	関根 博 (昭26)	小幡 裕 (昭28)
加納 六郎 (昭20)			山上健二郎 (昭17)	大池 和祐 (昭24)
			新田 実男 (昭22)	小川源太郎 (昭27)



東部	西部	南部	北部	三多摩	勤務医部担当	副部長	大学	公立	法人・私立	監事	東京ののはな会役員会報告	開催日	午後6時半
A 道永 麻里 (昭56)	B 藤山 嘉信 (昭30)	小川聖二郎 (昭41)	A 小杉 秀雄 (昭24)	B 田中 光 (昭24)	浅利 行男 (昭30)	久保 長生 (昭45)	山口 哲生 (昭53)	伊藤 達雄 (昭42)	宮下 久夫 (昭38)	阿部 浩次 (昭24)	川辺 兼美 (昭28)	7月31日	
						高穂 昭 (昭45)	濱野 恭一 (昭33)	武野 良仁 (昭28)					

役 割 分 担 (敬称略)		正光、村瀬靖 議 題	
庶務部	担当理事	小杉 濱野 (勤務医部会)	①役務分担 長澤会長が会則の総務の役が不明瞭な事と、会の新しい方向を考え、左の様に役割を設け、協議の結果左記に決定
	担当理事	道永 久保 (勤務医部会)	②会費増収方法について 各地区理事が努力する様、地区及理事を刷新した。(註)昨年迄の支部長を理事と改称
	担当理事	村瀬 武野 (勤務医部会)	③会員名簿の発行について 勤務医部会の名簿を含め年内に発行する。
	担当理事	小川 済陽 (勤務医部会)	④会報の発行について 第4号誌を9月末で原稿締切りとして、広告料を多く集められれば従来の豪華版で発行する。
広報部 名簿発行事業	担当理事	道永 久保 (勤務医部会)	⑤女医会の発足について 来年の新年会までに具体化する。
	担当理事	村瀬 武野 (勤務医部会)	⑥大学と勤務医、開業医との連携について 関根副会長が千葉大学同窓会本部と協力して、全国及び東京ののはな同窓会ホームページ、Eメールを作る。議事録作製 小杉秀雄理事
会報発行事業	担当理事	小川 済陽 (勤務医部会)	
	担当理事	赤畑 山口 (勤務医部会)	
病診連携部 (仮称)			
経 理 部			

四国のはな会便り

四国のはな会の第1回目の会合が平成12年4月22日、高知市司本店で開催されました。現在、四国地区には35名ののはな同窓会員が在任しており、高知医大では小越章平先生(昭36)が副学長、藤本重義先生(昭38)が免疫学教授、愛媛大では牧野英一先生(昭42)が臨床検査医学教授、徳島大では蛇名洋介先生(昭48)が分子遺伝学教授として活躍されております。

ところが四国は同窓会員の数も少なく、交通事情も悪いためか、会員相互の連絡も疎遠で同窓としての連帯感が乏しくなりがちでした。そこで同窓の連帯と親睦を深めるため、四国ブロックでののはな会を開催しようとして小越先生と内海武彦先生(昭44)が提案され、今回の会合が開かれた次第です。

当日は、高知県より6名、愛媛県より3名、香川県・徳島県より各1名の会員と奥様方3名の計14名が出席されました。

まず、発起人である小越先生の挨拶に始まり全員で乾杯の後、各自自己紹介を行いました。高知名物の豪

快な皿鉢料理に舌鼓をうちながら、懐かしい昔話や最近の医療情勢にいたるまで話が弾み、大いに盛り上がった夜でした。最後にこの会の会長に小越先生を、理事に宮地健三先生(昭26)森

山典男先生(昭28)山野徳雄先生(昭30)牧野英一先生を選出し、来年は松山市の道後温泉で第2回目の会合を開くことを決定し閉会となりました。出席者(敬称略)宮地建三(昭26)、森山典男(昭28)、山野徳雄(昭30)、小越章平夫妻(昭36)、須崎勢至(昭48)、松



谷和穂(昭50)、山本博憲(昭50)夫妻、山本日出樹(昭50)、多田羅勝義(昭52)夫妻、北川素(昭53)、大沼裕(平2)(山本日出樹・昭50)

信州るのはな会便り

今年は3年に1度の総会の年にあたり、今世紀最後の会合として、去る6月17日(出)、長野駅前のホテルメトロポリタンで、千葉からるのはな同窓会会長井出源四郎先生(信州佐久出身)、呼吸器外科藤沢武彦教授(北信三水村出身)を来賓としてお迎えして開催され

た。

熊谷支部長の挨拶の後、この3年間に、支部長を長く勤められ、会の長老であった百瀬孝雄先生(昭6)が11年1月に、他に河野卓爾先生(昭20)、堀内伸先生(岩専19)、田畑猛行先生(昭20)、宮島健郎先生(昭23)、田中幸夫先生(昭12)、馬島昭三先生(昭28)、小西義男先生(昭23)の7名の先輩がご他界され、会か

ら弔電とお花をお供えた旨報告があり、黙祷が捧げられた。このように平成3年には100名であった会員も年々減少して現在は78名となり、時の流れとはいえ淋しいかぎりです。

支部の名称については、従来「千葉大学るのはな同窓会長野県支部」でしたが、熊谷支部長より「信州のはな会」への名称変更が提案され、これには信州出身の井出・藤沢両先生も大いに賛同いただき満場一致で決定した。

宮坂斉幹事(昭42)からの会計報告に続いて井出先生の祝辞・本部報告となる。我が医学部は千葉大の中にあって長い伝統のある中心的な存在であり、全国各地のるのはな会が縦系であれば、各卒業年のクラス会が横系で、この縦系と横系とが織りなす錦がるのはな同窓会である。最近のるのはな同窓会報誌が着実に充実し、同窓会員の情報交換に多に役立っている。さらに日中友好病院創設時の日本代表として、交渉が暗礁に乗りあげた時に、その席上で先生が愛飲されているタバコの



「トーク」「ホープ」「ピース」を相手方にプレゼントして、トーク・ホープ・ピースでゆこうと強調し、「管鮑貧時交」の詩などを挙げて意志の疎通を図り、会談が成功に至った苦労話などを40分間無原稿で、いつもながらの先生の名調子「井出節」で熱っぽく語られ、感銘深く聞き入った。最後に今年御年80才を迎えられたとのことで「支えられ八十路の坂の蟬時雨」の句を披露されて話を結ばれた。

記念講演は藤沢先生の「肺癌診療の最近の進歩」で、座長は同級生の宮坂先生が務め、藤沢先生は学生時代サッカー部では速攻を得意とし、また学問の分野でもそのように活躍されて

いるが、42卒には村出身者が4人で内2人が教授になっているとユニークな紹介をされた。藤沢先生は本題に入る前に大学の近況として、医学部の大学院大学化に向けての変革が一步一歩進んでおり、その一環として先端第一外科と第三内科で教授選考が行われ、第一外科では昭50卒の宮崎勝先生に決定した旨報告された。ついで本題に入り、現在呼吸器外科の研究テーマとして、一、肺移植、二、肺癌の免疫療法、三、肺癌の早期診断・前癌病変の同定、四、重粒子線を用いた肺癌治療を4本の柱としており、このうち肺癌の早期診断について詳しく述べられた。ヘリカルCTや蛍光内視鏡の使用、それに拡大内視鏡の開発などにより早期癌の発見や前癌病変の診断を行い、最近の術後成績は飛躍的に向上しているとのことでした。術式も機能温存を目指す部分切除や区域切除が増加しており、肺癌治療の流れとして早期癌に対し縮小手術ないし外照射(重粒子線による)が行われることが予想され、肺癌分野で



は胃癌の早期発見に比し未だ遅れてはいるが、早期発見へのゴールに向かって道は開かれつつあることを強調され講演を終了した。

両先生の熱演で予定時間が20分オーバーし、早速別室の懇親会場へ移転した。宮坂幹事の司会、熊谷支部長による乾杯で開宴となり、和洋料理に舌鼓を打ちながら酒杯を傾け、一時間間の経つのも忘れ楽しい歓談のひとときを過ごした。これらの交流の中で、現在肺癌の細胞診断で欠くことができないブラッシング法を40年前に硬性気管支鏡下に開発、発表された土手内先生(昭26)―当時一外科―と気管支鏡検査の重要性を強調される藤沢教授が熊谷

先生の紹介で知り合い、話しが弾んだことを特記しておきたい。

閉会も近づき、今井先生(専26)の発言で井出先生の長寿を願って万歳三喝を、信州大病理教授重松秀一先生(昭39)の発声による信州一本締めで会の締めくくるとし、また3年後に再会を約し新信州のはな会総会の幕を閉じた。

今総会の出席者は27名で記念写真左上の通りです。

第1列左から岡野照美(昭39)、繁田美香(昭56)、熊谷信夫(昭28)、井出会長、藤沢教授、土手内守人(昭26)、夏目隆一(昭31)、重松秀一(昭39)、

第2列左から今井良夫(専26)、宮坂斉(昭42)、秋谷徹(昭50)、笠井妥陵(昭42)、辛京碩(昭40)、紅谷明(昭51)、内藤威(昭48)、栗田紀夫(昭59)、繁田達也(昭55)、花輪孝雄(昭45)

第3列左から永井啓之(金大平10)、黒沢永(平6)、腰塚周平(平9)、平敷好一郎(平9)、春日建邦(昭34)、野本高志(昭38)、原征洋(昭42)、清水俊行(昭56)、松林巖(昭54)、石毛英男(秋大昭56)、横山宏(昭34)。(花輪孝雄・昭45)

千葉のほな会便り

平成12年度千葉県

るのほな会総会報告

平成12年5月20日(土)、千葉県成ホテルにおいて12年度総会が開催された。

香田真一(昭31)副会長の開会の辞に続き、本年度の物故会員(20名)の敬弔が行われ、続いて渡辺武(昭27)会長の挨拶ののち、恒例により議長に会長を選出し議事に入った。

名簿改訂ならびに新名簿発行に関する件、それに伴う会則改定に関する件、会

報発行に関する件が大浜博利(昭27)理事により上程され、それぞれ承認された。

ついで会務報告を茂又眞祐(昭22)理事が、会計報告を阿部一憲(昭39)理事、監査報告を国井光智(昭21)理事が行った。

次に来賓を代表して井出源四郎先生にご挨拶を頂いた。今年80歳になられるとは思えない明朗闊達なお話振りのなかで、色々な分野で35もの役職を引き受けたが今は15くらいに減らしてもらったとか、数々の事件や犯罪の根底には、親離れ・子離れができていない現在の日本の教育に問題がある等々、まだまだ先生のご活

躍を期待するものがあった。三枝一雄(昭32)監事の閉会の辞で総会は終了し暫時休憩の後、若新政史(昭38)理事が座長を務め、千葉大学医療情報学の里村洋一教授に「情報革命」と題して講演して頂いた。

講演の要旨は、21世紀に目指す新しい医療は量より質・数より効率・物よりサービス・孤立より連携(病診連携など)・均質より個別というように物から情報へという流れが進んでいく。これによって患者は最小限の時間と費用で情報を得ることが出来る。

医療機関間の通信により、患者データの共有が出来、新しい情報基盤がプライバシー保護を含めて情報の安全性が構築される。

電子カルテを採用することにより、医療機関内では診療録管理の省力化即ちスペース、人件費、機器の大幅な削減と待ち時間ゼロのカルテ供給が出来る。また、診療データは法定の5年を超えて紛失ゼロの長期保存と管理が可能。情報開示、インフォームド・コンセント、管理統計にも利用出来る。社会的効用としては、診療データの共有・情報開示・疫学調査の効率化・診療報酬制度の評価・臨床医

学研究の推進・EDSの基礎データ収集などにより、医療の質的な向上と効率化が図れる。

また、遠隔医療(Telemedicine)に関しては、施設間カンファランス、診断支援(Teleradiology, Telepathology等)、遠隔外来診療、在宅医療支援、救急医療支援(救急車、船舶、航空機、山岳...)、僻地医療支援(山間、孤島、豪雪地...)が可能となる。

これからの医療「E」化の課題として、技術的課題、法的環境、データセキュリティ、経済的合理性が問題となる。法的条件としては、保存条件、通信基準、印鑑と署名、証拠能力と証明力をどうするか。情報の共有と開発の効率化には国際的な標準化機構が必要である。

すでにEDS各国の標準化機構としてはBSI(イギリス)AFNOR(フランス)ISO(スウェーデン)などがある。

我が国も96年に開始された標準化機構(ISO/TC215)の確立作業に加わっている。この目標とするところは、医療情報と電子カルテのモデル、通信規格、概念と用語、データセキュリティ、健康カードを標準化することにある。なかでも医学用語(日本語)の標準化が重

要である。文字レベルでは、朝↓朝、脳↓脳、頸↓頸、彎↓彎、囊腫↓のう腫、異形↓異型、埋め込み↓埋めこみ、蛔虫↓回虫など「日本医学会医学用語辞典」を優先して準拠し標準化する。基本語レベルでは、睾丸↓精巣、ヘルペス↓疱疹、熱傷↓火傷、夏期↓夏季、ミオパチー↓ミオパシー、ビュルガー↓バージャーなどである。

次に「革命の時代に予想される脅威について、データの破壊(消去、改変など)、データの盗用・盗聴、プライバシーの侵犯などがある。これについて厚生省は99年4月に「診療録等の電子媒体による保存について」の通達を出している。真正性・見読性・保存性などについてであるが、医療機関が自己の責任において保証する情報化を支援するための規制緩和も必要であろう。

最後に医療の質と効率を確保するために、質をどのように評価するか、効率をどう計測するかが問題であり、それには医療保険制度の改革が不可欠であると述べられた。

講演会終了後、懇親会が神田収茲(昭32)理事の開会の挨拶で始まり、和やかな談笑のうちに旧交を温め、

近況を語り合い有意義な一時が過ぎ、武者廣隆(昭40)理事の中締め言葉で閉会となった。

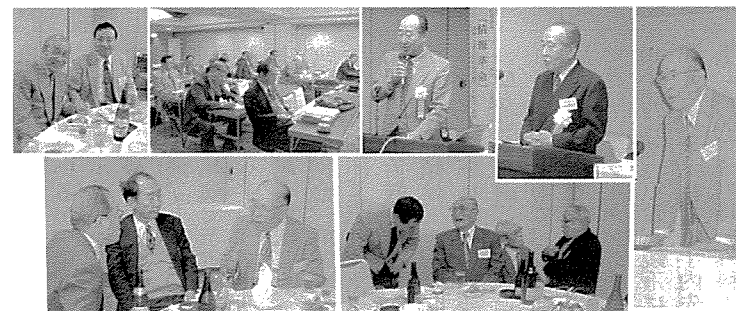
【出席者】竹蓋壮一郎(昭18)、宮城和彦(昭18)、井出源四郎(昭19)、小林愿之、国井光智、茂又眞祐(昭22)、石橋祝(昭22)、萩原彌四郎(昭23)、伊東和人(昭23)、越川衛(昭23)、佐々昭三(昭25)、相磯敬明(昭25)、渡辺武(昭27)、大浜博利(昭27)、桜井稔(昭27)、樋口道雄(昭29)、香田真一(昭31)、神田収茲(昭32)、高橋英世(昭32)、三枝一雄(昭32)、高木良章(昭34)、真家雅彦(昭35)、若新政史(昭38)、栗原伸夫(昭38)、阿部一憲(昭39)、滝澤弘隆(昭40)、武者廣隆(昭40)、那須武(昭41)、内田朝彦(昭46)、秋葉哲生(昭50)、平井愛山(昭50)、篠宮正樹(昭50)(卒業年度順、敬称略)

(追記)2000年度の「千葉るのほな同窓会本部の名簿に準拠して発行致しました。転居、転勤、ご逝去などにより、ご迷惑をかけた先生方もおられると存じますが、お許し願いたいと思います。尚、

会則の改正により千葉大学医学部の教室員及び卒業後10年に満たない医師は原則として除く事となっております。賛助会員については、入会のご希望を本部事務局までご連絡頂ければ幸甚です。

本会創立5周年を迎え、来年3月に「千葉るのほな会誌」を発行する予定です。多数の先生方のご投稿をお待ちしております。

(大浜博利・昭27)※「千葉るのほな会名簿」25頁下から7行目、田沢洋一の電話番号追加043-287-7778



安房のほな会便り

平成12年4月12日(水)

安房のほな会(会長本位田泰介・昭28)は、館山市「みのや」に、卒後・生涯医学臨床研修部田辺政裕教授をお迎えして、年1回の総会を開催した。

会長挨拶、会計報告等の後、田辺教授の御講演となった。田辺教授は、医療を巡る諸状況の変化に触れつつ、卒後・生涯医学臨床研修部の役割と卒後臨床研修必修化について熱弁をふるわれた。

講演後懇親会となった。15年前(昭和60年)は、会員数32人で盛会だったが、現在安房医師会病院医師を除くと16人に半減し大変寂しくなっている。今回は、医師会病院の若い医師の参加も得て、少し賑やかな懇親会となった。

出席者氏名 野原 宏(専17)、本位田泰介、貴家昭而(昭30)、蟹沢晴子(昭32)、原 久弥(昭34)、西川義明(昭34)、佐伯陳哉(昭35)、青木 謹(昭36)、本多 満(昭37)、関谷信平(昭38)、上村公平(昭50)、植木良裕(昭53)、渡辺啓治(昭61)、辻 博勝(平2)、三田 謙・天野

講演後懇親会となった。15年前(昭和60年)は、会員数32人で盛会だったが、現在安房医師会病院医師を除くと16人に半減し大変寂しくなっている。今回は、医師会病院の若い医師の参加も得て、少し賑やかな懇親会となった。

クラス会

(昭25卒)

平成12年3月26日(日)に大卒卒業50年のクラス会をセンシティブタワー海燕亭で開きました。

私達クラスは十数年来、毎年5月の第3土曜日にクラス会を千葉駅ビル、ペリエホールで開催していましたが、本年は卒後50年の節目ということで、日を繰り上げ3月とし、場所を変え、お客様をお招きして開くこととし、場所については色々物色しましたが、結局、駅に近いことと千葉市が一望出来るので此処、海燕亭としました。

お客様は、お客様は、るのはな同窓会長井出源四郎先生、同千葉県支部長渡辺武先生、医学部長谷口教授にご案内いたしました。谷口教授はすでに日程が入っていて欠席されましたが、井出、



渡辺両先生にはご多忙中にもかかわらず御出席の上、御挨拶をいただき有り難う御座いました。心より感謝申し上げます。

当日の出席者の最年長、小藤田和郎君の音頭で乾杯し懇親宴会に入りましたが、其の様子は安原英二君の別掲の詩の通りでした。

昭和廿五年卒同窓會
於千葉駅前海燕亭
眼下俯瞰東京湾
負笈通路在奈辺
星霜流轉半世期
退齡朋友語青春
平成十二年三月廿六日

昭和25年3月の卒業生は、休学して半年遅れで卒業した鈴木義雄君を含め60名でした。3名は所在不明で、22名死亡、残り33名に連絡を取りました(内1名死亡)。

当日の出席者は16名の予定でありましたが、常連の平井俊児君、関根康男君が体調を崩され急に欠席となりました。出席者は14名でした。

写真右より佐久間光史、葛田瑞世、松平英平(立)、小藤田和郎、坂巻皓(立)、針谷英世、鈴木敬、井出會長、中村英史、渡辺支部長、村上正、稲田正實、池田佐嘉衛(立)、片山一郎(立)、越後貫誠、安原英二(立)。

次回の予定は未定です。(中村英史)

八千会

(専26卒)

平成12年5月20日 長野市ホテルメトロポリタン長野において、卒後49周年の同級会が開催された。牛に曳かれて善光寺参りに因んで八千会に惹かれて善光寺参りしやれこんだが、今までの陸の孤島のイメージ?と寄る年波?と闘病中のも、さらに家庭の事情等と織りなす条件をクリアできた人は、単身5名。夫婦5組15名であった。しかし佐

世保から(松本まで空の便)また東京方面(新幹線)から来られて長野は意外と近く、改めて親しみを覚えて戴いた。

総会は12名の故人のご冥福を祈ってから、森会長挨拶・大沢幹事の総務報告・会計報告・佐藤監事代理の監査報告とかがどろりに進められ、来年50周年の会合の件は千葉市開催を決議し、詳細は関東在住の会長・幹事に一任とすること終了。

懇親会は岡谷の林君の歓迎の挨拶に始まり、佐世保の原君の乾杯の発声と同時に歌手(小松俊彦氏)の歌声に始まる。

しばらくオペラ歌手に魅了されながら酒杯を重ね、ほろ酔いの頃合いを見計らって、各自の近況報告や特殊事情の報告に耳を傾ける席がいろいろ



こんで、話題が盛り上がり、時の過ぎるのが、忘れかか頃、葛飾区の菊島君の発声で一本締めを行い、全員二次会場へ。ホテル12階スカイラウンジ アポロでは更に話が盛り上がり、長野市の夜景と流れる音楽に包まれて、時の経つのを忘れた。

翌21日は、エムウエーブの長野冬季オリンピック記念館を訪ね、感激の映像を20分あまりと会場を見学して当時を思い起こす。ついで善光寺は寿量院の住職(小山氏)の案内で丁度12

沖縄県支部

を訪問して

渡辺 武(昭27)

平成12年7月8-9日と日本ブライマリ・ケア学会が沖縄市のロワジーホテル、パシフィックホテルで開催されました。比嘉沖縄県医師会会長が学会会頭となりメインテーマ「社会と共に歩むブライマリ・ヘルス・ケア」みんなで支えよう健やかな高齢社会」のもとに全国から100人以上の会員が台風にもめげずに参集しました。

そして9日には学会終了後にるのはな同窓会沖縄支部長の長田紀春先生(昭和17年卒)をはじめとして8人の先生がたが折角の日曜日にかかわらず私を東急ホテルに招待してくださいました。

2時間ばかりの懇談のなかでそれぞれの同窓生の動

よせる。出席者写真前列向かって右より、(敬称略) 菊島夫人・原夫人・原寛・小松俊彦(歌手)・森夫人・大沢夫人・今井夫人・後列同右より、菊島竹丸・上野友弥・林祐平・大沢和明・佐藤宏・津村澄雄・片桐優・森巨敬・今井良夫(今井良夫)

静やら活動などの話のなかで母校への懐かしさをひしひしと感じました。

同窓会本部の報告やら、ちょうど私ののはな賞受賞にからめて日本ブライマリ・ケア学会の宣伝までやや独演会となっていましたことを恥じています。

最後に日本ではじめて在宅ホスピスを英国から導入された日本ブライマリ・ケア学会副会長の鈴木莊一先生(東京医科歯科大学卒)を同伴し神髄の一端を話してもらった機会を得て大変光栄と恐縮しておりました。

支部会員は56人で毎年2回の懇親会をもっているとのことでした。

本部のかたがたによろしくと玄関まで皆さんに送られ温かい同窓会の一時はアツというまに終わりました。

沖縄ののはな会支部のますますの発展を祈りながら空港へと急ぎました。

るのほな同窓会総会に出席して

長谷川潔(昭56)

先日、目白の椿山荘で行われた東京るのほな会、及びるのほな同窓会総会に出席し、井出会長(当時)をはじめ、懐かしい先生方、含蓄に富む、また時には愉快なお話を耳を傾け、懇親会でビールを飲み、ご馳走を食べ、久々に会った同級生と近況などを話し合い、再び日常の生活に戻ったその数日後に、感想文を書いたのは、恐らくこの年に初めて出席したことが目に留まったからではないかと思えます。椿山荘は、小生の勤務先の東京女子医大からも、拙宅からも、ともに10分の距離にあるのですが、この会は何となく遠い世界への催し事のように感じておりました。ところが最近になり、女子医大るのほな会の幹事(年に1回、小幡教授、羽生教授、浜野教授を中心に、にぎやかに開かれます)や、東京るのほな会の勤務医部会の末席の幹事などを引き受けるようになり、知らん顔もできないだろうと、お恥ずかしいながら、初めて出かけ

た次第です。会では、井出会長から、長澤新会長への引き継ぎ、奨学金の贈呈、新会員や、新任の理事の先生方の紹介などが、和やかに行われました。特に井出先生には、長いこと同窓会をまとめ、後輩の研究や、診療面への同窓会からのバックアップなど大変なご尽力には頭が下がります。また会では、時々患者さんをご紹介くださっていた開業の先生がるのほなの大先輩であったことを知り、どこで仕事をしていた、るのほなはネットワークの広さ、大切さを感じ入った次第です。女子医大は、るのほな会員が非常に多いのですが、つながりは希薄です。目下、小幡勤務医部会会長のものと、会の充実を図っています。小生も微力ながら、お役に立ちたいと思っています。

奈良橋俊子(平9)

「先生たちが今日の出席者の中で一番若いから、皆さんの前で自己紹介して下さい。」司会の先生の突然のご指名に、偶然るのほな同窓会に出席していた同級生と顔を見合わせ慌てふためき、しばし呆然。(大勢の前でしゃべるのは大の苦手なのです。)しかし時間もないので、気を取り直し「例年みなさんはどんなことをおっしゃるんですか?」と傾向と対策を練る。「ざっくりと聞いていいですよ。去年の女性は、結婚相手を募集中です、よろしくお願ひしますって言ってましたよ。」この言葉を聞いた私は、すっかり気が大きくなり、一通りの自己紹介を終えたあとに「バイト料を払ってもらえず、失職してしまいました。現在バイト募集中です。何でもいたしますので、よろしくお願ひします。」と壇上から笑顔で挨拶してしまいました。

諸先生方は大笑いで、あちこちから声をかけていただき談笑していると、こちらを手招きする先生がいるではありませんか。?と思いつつ近づいていくと、この先生に頼めば大丈夫、すぐみつかると一人の先生を紹介してくださいました。驚いたことに、中山恒明先生の直弟子でとても偉い先生です。淡い期待を抱きつつも、お忙しくて今日はじめてあった私のことなんか忘れてしまうかもしれないと複雑な思いでした。その後は学生時代には教壇の上の姿しかお見受けできなかった先生方や、東京でご活躍の多くの先輩方とも思いもかけずお話でき、とても楽しいひと時でした。

非常にうれしいことに、なんとこの数日後には仕事を紹介していただくことができました。迅速な行動力にはほんとうに感服しました。そして格別のご配慮に對しこの場を借りて御礼申し上げます。この4月に東京に戻ってからは、千葉とは精神的にもすっかり遠くなってしまったような感じがしていただけに、先輩方の温かさに触れ、同門の良さを再認識しました。

平成12年度るのほな同窓会総会議事録

京になって考えれば、大先輩方が居並ぶところであんなことをよく言ったものだと思ふ限りですが、また来年も行ってみようかなと思う今日この頃です。

一、平成12年度事業計画について
案が承認された。

二、平成12年度事業計画について
木内理事より、同窓会活性化の施策(同窓会報の充実、るのほな同窓会賞の充実、学内・学外への各種助成の充実、会費自動振替の推進)に関する説明、医学部学生図書購入の助成に関する説明、本部と支部間のネットワーク作成に関する説明、同窓会各支部の活性化支援に関する説明があり、各々承認された。

三、平成12年度予算(案)について
中島理事より遠隔地支部立ち上げ支援、同窓会賞の充実等昨年度との相違点につき説明があり、承認された。

四、名誉会員の推薦について
木内理事より平成12年3月に退官された二教授(佐藤甫夫、嶋田裕)の名誉会員への推薦趣旨の説明があり、承認された。

五、会則改正について
木内理事より会則改正について説明があり、第10条の一部改正(常任理事の定員を30名以内から30名前後とする)案が承認された。

六、役員選出について
木内理事より、後任会長の選出について説明があり、新会長に長澤仁一理事が選出された。また動議により、井出会長の名誉会長への推薦が提案され、承認された。

報告事項
一、学外研究助成選考について
矢野明彦理事より、委員会による選考経過と各候補者(青柳正彦、安藤稔、木村邦夫、木村直弘、三枝敬史、坂本昭雄、坂本忠、福澤茂、山口哲生)の推薦理由の説明があった。

二、るのほな同窓会賞選考について
矢野理事より、選考委員会による選考経過と功

労賞(伊藤敏夫、小張一峰、渡辺武)、学術賞(岡田誠治、榊原隆次、鈴木啓悦、中郡聡夫、中澤健、難波宏樹、山田浩史)の各候補者推薦理由の説明があった。

三、同窓会会報
鈴木信夫理事より同窓会会報の内容のさらなる充実に向けての編集方針につき報告があった。

関根博東京るのほな会理事のご挨拶で閉会となった。



るのほな同窓会賞表彰式

矢野理事の司会のもと、るのほな同窓会賞(功労賞3名、学術賞7名)の表彰式があり、井出会長からのご挨拶、表彰楯の授与および受賞者のご挨拶があった。

懇親会
小杉秀雄理事・久保長生東京るのほな会理事の司会で近藤洋一郎副会長の開会の辞、井出会長、

ゐのはな
同窓会役員

長澤新会長のご挨拶、名
尾良憲名誉会長の乾杯に
始まり和やかに歓談の時
を過ごした。浜野恭一東
京るのはな会理事の同窓
会の益々の発展を祈る旨
のご挨拶で閉会となった。

[illegible][illegible]

平成 11 年 度 決 算 報 告 書

収入の部

款 項 目	予 算 額 (円)	決 算 額 (円)	対予算額 (円)
会 費 等	15,430,000	15,250,250	-179,750
他 会 計 よ り 受 入	250,000	1,120,374	注 870,374
寄 付 金	3,250,000	3,291,897	41,897
雑 収 入	110,000	1,242,061	1,132,061
(当 期 収 入 計)	19,040,000	20,904,582	1,864,582
前年度繰越資金受入	5,569,016	5,569,016	
収 入 合 計	24,609,016	26,473,598	1,864,582

注：定額郵便貯金利子

支出の部

款	項	目	予 算 額 (円)	決 算 額 (円)	対予算額 (円)
総	務	費	8,490,000	8,963,385	-473,385
事	業	費	14,260,000	14,934,221	-674,221
予	備	費	1,559,016	0	1,559,016
積	立	金	300,000	300,000	0
次	期	繰越収支差額	0	2,275,992	-2,275,992
支	出	合 計	24,609,016	26,473,598	-1,864,582

平成 12 年度 予算 (案)

収入の部

款 項 目	平成12年度予算額(円)	平成11年度決算額(円)	対前年度決算増減額
会 費 等	24,700,000	15,250,250	9,449,750
他 会 計 よ り 受 入	5,520,000	1,120,374	注 4,399,626
寄 付 金	4,050,000	3,291,897	558,103
雑 収 入	70,000	1,242,061	- 1,172,061
(当 期 収 入 計)	34,340,000	20,904,582	13,235,418
前年度繰越資金受入	2,275,992	5,569,016	
収 入 合 計	36,615,992	26,473,598	13,235,418

注：定額郵便貯金利率

支出の部

款	項	目	平成12年度予算額(円)	平成11年度決算額(円)	対前年度決算増減額
総	務	費	10,540,000	8,963,385	1,576,615
事	業	費	17,410,000	14,934,221	2,475,779
予	備	費	5,365,992	0	5,365,992
積	立	金	3,300,000	300,000	3,000,000
次	期	繰越収支差額	0	0	0
支	出	合計	36,615,992	24,197,606	12,418,386

宮田	堀	増田	稲田	大築	木村	熊谷	山口	箕山	北条	矢口	山口	宮地	恩田	山崎	鈴木	宇井	恩田	安藤	井上	伊藤	齋藤	中村	塩田	佐藤	白倉	秋谷	浅利	川口	阪本	中原	滝沢	斎藤	大野	梁	中原
光男(喪妻昭8)	光一(京城大昭10)	熙昭(喪妻昭11)	武夫(昭12)	安春(昭13)	康正(昭13)	俊夫(昭14)	千尋(昭16)	子哲(昭16)	龍彦(昭16)	明(昭16)	清次郎(昭16)	照彦(昭19)	威明(東医專18)	秀雄(專19)	雅美(昭20)	潤一郎(專20)	嘉明(東医專20)	哲二(昭23)	正士(昭23)	宏(昭23)	宏(專24)	民男(順專26)	昭夫(昭27)	武慈惠(27)	賢三(專27)	政雄(昭28)	有昭(昭28)	光(昭29)	充伸(昭30)	幹雄(昭30)	明祐(昭31)	友宏(昭32)	了昭(昭42)	哲宗(昭50)	利郎(昭56)

おくやみ

同窓会賞規定

(目的と対象)

第1条 本規定は本会会員(甲および乙)の学術および文化諸分野における顕著な功績に対し、これを顕彰することを目的とする。受賞対象となる活動は国の内外および地域を問わない。

(顕彰の種別)
第2条 顕彰の種別は学術賞および功労賞とする。

1、学術賞は、医学あるいは医療活動の顕著な業績により、学術的あるいは社会的に高い貢献をした会員(個人あるいはグループ)に授与する。

2、功労賞は、医学あるいは広く文化の各領域において千葉大学および千葉大学あるいは同窓会に多大の貢献をしたものに授与する。

功労賞の区分は以下の四種とする。

国際賞

国際交流および海外医療の向上に尽くしたものの教育・文化賞

教育・芸術およびスポーツなどの領域において功績顕著なもの

医療・福祉・行政賞

医療・福祉・行政の分野

野において優れた事績のあるもの

社会功労賞

自己の危険を顧みず人命救助したもの、公益のため私財を寄付するなど功績顕著なもの

(同窓会賞選考委員会)

第3条 本会に同窓会賞選考委員会を置く。

同窓会賞選考委員会は、会長の諮問に応じ、ゐのはな同窓会賞の候補の選考に関する事項を調査審議する。

委員会は応募者の中より学術賞5件以内・功労賞3件以内の受賞候補者を選考する。

(選考委員)

第4条 選考委員会の委員は、ゐのはな同窓会常任理事会が6ないし8名の委員を推薦し、ゐのはな同窓会会長が委嘱する。

委員の任期は、2年とする。委員の再任は妨げない。ただし連続2期までとする。欠員が生じた場合、補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

委員の互選により委員長を置く。

(組織および運営の細目)

第5条 前条までに定める

ものの他、組織および運営の細目については常任理事会の承認を得て選考委員会が定める。

(申請応募の原則)

第6条 同窓会賞受賞希望者は、同窓会賞募集要項に基づき、所定の申請書に必要事項を記載し応募するものとする。

募集要項は、ゐのはな同窓会報に掲載する。

申請は自薦・他薦を問わない。

(受賞者の決定)

第7条 受賞者の決定は選考委員会、常任理事会の議をへて会長が行う。

(賞状および副賞)

第8条 受賞者には本会より楯および副賞を贈呈し、受賞対象となった業績、氏名をゐのはな同窓会総会およびゐのはな同窓会報に公表する。

(記念講演)

第9条 受賞者はゐのはな同窓会総会にて記念講演を行う。

付則

本規定は、平成9年11月26日から施行する。

平成7年6月24日制定のゐのはな同窓会賞選考規定および平成9年2月26日制定のゐのはな同窓会顕彰規定(功労賞)は廃止する。

ゐのはな同窓会学外研究助成(以下学外研究助成)規定

第1条 目的と対象

本規定は本会会員(甲および乙)の研究活動を推進するため、研究課題を公募し生命科学・臨床医学の進歩、健康と福祉の向上に貢献できる優れた研究に対し研究費の助成を行うものである。助成対象は国内外の大学ないし、それに準ずる研究所以外の施設で本会会員が代表者となつて行うものとする。

第2条 助成要項 本会は別に定める募集要項により年1回研究課題の公募を行い、優秀な研究数件に対し、助成を行う。募集要項はゐのはな同窓会報に掲載する。助成金額については、常任理事会で決定する。

第3条 委員会 本会に学外研究助成選考委員会(以下委員会)を置く。委員会は会長の諮問に応じ、助成の候補となる研究課題の公募と選考を行う。

第4条 委員会の構成 委員会を構成する委員は6ないし8名とし、ゐのはな同窓会常任理事会の推薦に基づき、ゐのはな同窓会会長が委嘱する。委員の任期は2年とし半期に半数を改選する。委員の再任は妨げないがその期間は2期を超えないものとする。欠員が生じた場合、補欠委員の任期は前任者の残任期間とする。

また、委員の互選により委員長を置く。

第5条 組織および運営の細目 前条までに定めるもののほか、選考委員会の事務運営の細目については常任理事会の承認を得て委員会が定める。

第6条 助成研究の決定 助成研究の決定は選考委員会、常任理事会の議をへて会長が行う。決定された助成については課題名、研究

代表者、研究施設名をゐのはな同窓会総会およびゐのはな同窓会報に公表する。

第7条 研究報告 学外研究助成を受けた代表研究者は一定期間内に、学術誌に公表された研究内容および、

助成金の会計を本会に報告しなければならない

付則 本規定は平成11年4月1日から施行する。

内科医師招聘

医療法人 三矢会

開設者 吉永雅俊(昭36卒)

当会は昭和年東金市に27床の個人病院から発足いたしまして、現在、東金市に両総病院(99床)八街市に八街総合病院(267床)の一般病院を開設しております。

今日まで、民間病院として地域医療に微力ながら貢献できましたことは、第2外科の同門皆様ならびに千葉大学の同窓の皆様方のご支援の賜ものであり、深く感謝申し上げます。このたび、内科医師が欠員となり、一般内科をご担当して頂ける先生を募集致します。

募集人員 2名

勤務地 東金市両総病院、八街市八街総合病院のいずれか
年齢 65歳位まで

詳細につきましては担当者までご連絡ください。

連絡先

〒283-0066 千葉県東金市南上宿8-13 医療法人 三矢会
TEL 0475-5512700 FAX 0475-5412295

四金会のお知らせ

日時

平成12年11月22日(水)、午後5時30分より。

場所

千葉スカイウインドウズ東天紅(千葉駅前センシティタワー22階)

当日、叙勲された方々を御招待致します。一般会員には御連絡致しませんが、是非奮ってご参加下さい。

会費は3000円

附属病院ニュース

病院長 山浦 晶(昭40)

医学部附属病院の主な出来事

(H12年4月～7月)

平成12年4月5日 助産婦

学校入学式

看護学校、放射線技師学校の募集停止に伴い、助産婦学校のみの入学式となった。

12人の学生が入学した。

4月25日 医員(研修医)ガイダンスを実施

今年度から期間を長くとり強化したガイダンスとした。

講義終了後に習得度評価のためのミニテストと受講者によるコース評価を行った。

5月26日 第8回なのはな音楽部院内「コンサート」開催

患者さん約250人が熱心に耳を傾け、楽しいひとときを過ごされた。

6月17日 患者のための「なのはな文庫」開設

寄贈図書が200冊を越え整理が出来たことから、医学部学生ボランティアによる「なのはな文庫」がサービ

スを開始した。毎週土曜日に3階病棟エレベーターホールで貸出しを行っており、患者さんにも好評である。

卒業した浅野由美さん・門脇正美さんの準備活動を、佐藤真由美さんから医学部学生数名が受継ぎサービス開始までこぎつけたもの。

図書の寄贈は千葉大学医学部附属病院臨床医学助成会のご好意によるものである。

(皆様の図書の寄贈は医学部附属病院医療福祉部まで。)

6月26日～27日 医学部学生らの華道部による花展「花と安らぎ3」を開催

今回も多くの患者や職員が花展を楽しんだ。病院長は小原流河田師範の指導の下3回目の作品を披露。学生による作品の高度化が大いに評価されていた。合同作「壁の花」も注目を集めた。

前記の「コンサート」、

「なのはな文庫」、「花とやすらぎ」のいずれも医学部学生を中心としたボランティア活動である。附属病院はこのような医学部学生の病院ボランティア活動を大いに歓迎している。外部には

大学病院でのボランティアを引き受けて下さる方々は

少なくないが、是非、医学部学生に経験して欲しい。

卒業する前に患者の視点から病院や医師を含めた病院職員を見て、将来の自分達のあるべき姿を心の中に形作ってほしいと願うものである。

また、医学部では学生が行ったボランティア活動

なのはな同窓会賞

受賞候補者募集要項

第6回(二〇〇一年度)なのはな同窓会賞の受賞候補者を左記により募集致します。

一、受賞対象者

①学術賞 本会員(甲および乙)で、医学研究あるいは医療活動の顕著な業績により、学術的あるいは社会的に高い貢献をした個人またはグループ。特に学外の教育研究診療機関に居られる方と、学内では学位取得直後の層からの応募を歓迎いたします。

②功労賞 医学および広く文化の各領域において、千葉大学医学部および千葉大学なのはな同窓会に多大の貢献をした者。

二、表彰

①学術賞(五件以内) 楯および副賞(総額二百五十万円程度)を贈呈します。

②功労賞(三件以内) 楯および薄謝を贈呈します。

三、応募方法

所定の申請用紙により、二〇〇一年1月5日から3月5日までの間に申請して下さい。

四、受賞者の決定

選考委員、常任理事会の議を経て、会長が行います。審査結果は二〇〇一年5月中旬までに各申請者に通知すると共に、なのはな同窓会報に掲載する。

五、問い合わせおよび申請用紙請求先

千葉大学医学部内 なのはな同窓会事務室

適切に評価するシステムを考慮すべきであろう。



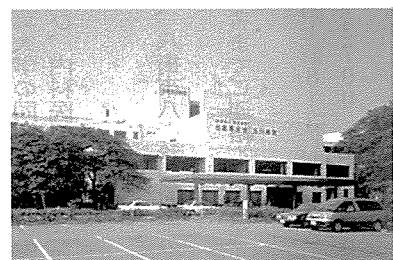
編集後記

東京なのはな会から、同窓会報の編集委員を頼まれてから、早や一年以上たった気がします。実際の編集は、学生時代から新聞部におられた、セミプロの方々にお願ひしているのが実体であります。東京の下町開業医では、新聞の整理編集など及びも付きません。病理学教室時代から、お世話になった井出源四郎会長にお会い出来るのを楽しみに参加しております。

最近、世の中が変革ばかりで、大学も開業医の世界も騒々しくなってきました。しかし、創造的な自然のうねりと言うものは何時の時代でもありましたし、特に医学のような人間臭い科学の世界では、その影響を受け易いのではないかと考えます。幕末から明治維新へ、太平洋戦争から敗戦への壊滅的な混乱に較べれば、今回の多分に経済色の濃い混乱などは動ずる必要はない感じですね。



現代では、貧困と耐久力のバネが必要なのかも知れません。(服部了司・昭27)



連絡先:

〒158-0095

東京都世田谷区瀬田4-8-1

日産厚生会 玉川病院 気胸センター

武野良仁

TEL: 03-3700-1151

FAX: 03-3700-2090

home page:

<http://www1.kcom.ne.jp/tamagawa/>

日産厚生会 玉川病院
気胸センター

医師募集

来れ！
優秀な後輩！

募集人員: 1名(呼吸器外科)

年齢: 35歳位まで

勤務形態: 医長(年齢により医員)

週1日研究日あり

給与: 病院の給与体系

当院は1953年創設以来、千葉大学との関係が非常に深く、呼吸器外科はずっと第1外科(当時: 河合直次教授)の同門が守ってきました。

当院は自然気胸内視鏡治療発祥の地だけあって、現在では患者が全国から来院、気胸の入院患者は年間平均330、常時20名以上の入院があり、毎週6-7例の内視鏡手術を行っています。最近では自然気胸のみならず肺気腫、線維症、癌も少なくありません。スタッフは武野良仁センター長(S.28卒)、栗原正利呼吸器外科部長(S.54卒)のほか研修医2名。長 晃平 内科医長[呼吸器](S.60卒)、肺研からの出張医師1名も常時センターと協同して診療、研究を行っています。